

敷島町文化財調査報告 第15集
(山 梨 県)

未 法 遺 跡 III

民間宅地開発に伴う古墳時代の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
有限会社 総 信

敷島町文化財調査報告 第15集
(山 梨 県)

未 法 遺 跡 III

民間宅地開発に伴う古墳時代の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
有限会社 総 信

序 文

敷島町の南部は荒川によって形成された扇状地形を成し、平成5年に行われた『遺跡詳細分布調査』ではこの南部地域に多くの遺跡が分布していることが明らかとなりました。

近年この地域では頻繁に開発が行われるようになり、敷島町として埋蔵文化財の保護が急務となってきています。

末法遺跡は平成5年の分布調査によって包蔵地として登録され、平成12年に民間開発による調査で、はじめてその存在が明らかとなりました。

ここに報告いたします第3次調査では、古墳時代の遺構をはじめ、縄文時代から中世までの幅広い遺物が出土をし、新たな歴史を提示する結果となりました。

今後は、調査で得られました成果を後世に伝えるとともに研究、教育、生涯学習の資として多くの皆様に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、有限会社総信及び地権者の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力を頂いた関係各位にお礼を申し上げ序といたします。

平成16年3月

敷島町教育委員会
教育長 山口 正 智

例 言

1. 本書は山梨県中巨摩郡敷島町大下条地内に所在する末法遺跡（第三次）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は宅地造成に伴って、敷島町文化財調査会が主体となり実施した。実務は同調査会より委託を受けた㈱日本窯業史研究所が調査員を派遣し、調査会として行った。
3. 調査は試掘調査を敷島町教育委員会小坂隆司が担当し、平成15年1月15日～同年同月20日まで行い、本調査を三輪孝幸が担当し、平成15年3月31日～同年5月2日まで行った。
4. 本書の執筆・編集は第1章を大塚正之（敷島町教委）、小坂、その他を敷島町教育委員会・同文化財調査会の指導のもと三輪が行い、倉田有子の助力を得た。遺構写真は図版2-3B号住居跡、図版3-4号住居跡は大塚、他は三輪が撮影した。また、遺物写真は河野一也が撮影・現像・焼付けを行った。
5. 本書に係る出土遺物及び記録図面、写真などは敷島町教育委員会で保管している。
6. 調査組織は次の通りである。

調査組織

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査担当者	三輪孝幸（㈱日本窯業史研究所）

7. 発掘調査と報告書の作成にあたり、次の方々より御教示を賜った。ここに御芳名を記し、感謝申し上げる。
 中込司郎、坂本美夫、羽中田壯雄、畑 大介（敷島町文化財審議会）、芹沢清八、篠原祐一（㈱とちぎけん生涯学習文化財埋蔵文化財センター）、水野順敏、河野一也、渡辺 務（㈱日本窯業史研究所）（順不同、敬称略）
8. 調査・整理参加者（敷島町文化財調査協力員）
 青山制子、飯室久美恵、石川弘美、大久保久美、長田由美子、小林明美、小林素子、関本芳子、高添美智子、堤 吉彦、徳坂美佐子、保延 勇、望月典子、森沢篤美（敬称略）

凡 例

1. 住居内の遺物の出土位置は、個体の判明するものについてP口番号で取り上げ、位置とレベルを記録した。それ以外の土器片については住居を4分割し、北東方から時計回りにアルファベットをふって取り上げた。
2. 挿図の北は磁北を示し、レベルは標高を表している。
3. 挿図の縮尺は遺構が住居・溝1/60、土坑1/40、遺物は土器（縄文・弥生・土師器・須恵器）、土製品が1/3、中世土器・陶器・船載陶磁、石製模造品・原石・フレークが1/2、石畿が2/3、打製石斧・磨石・砥石が1/3、石皿が1/4、管玉・ガラス小玉が1/1である。
4. 遺物観察表の寸法は上から口径、器高、底径を示し、数値の（ ）は復元寸法である。
5. 遺物番号は本文・挿図・観察表・図版で統一してある。
6. 挿図に使用した記号は以下の通りである。

遺物出土位置

土器 ・ 石 ・ ガラス小玉 ・

焼土  炭化物 

拓本



赤彩の範囲



目 次

第1章	遺跡をとりまく環境	1
	1. 遺跡の立地と環境	1
	2. 周辺遺跡と歴史的背景	1
第2章	遺構と遺物	6
	1. 竪穴住居跡	6
	2. 方形周溝墓	17
	3. 土坑	18
	4. 溝	18
第3章	その他の出土遺物	20
第4章	まとめ	26

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	第14図	4号住居跡・出土遺物
第2図	調査区位置図	第15図	5号住居跡・出土遺物
第3図	全体図	第16図	2号方形周溝墓
第4図	1号住居跡	第17図	2号方形周溝墓出土遺物
第5図	1号住居跡出土遺物	第18図	1号土坑
第6図	2号住居跡	第19図	1・2号溝
第7図	2号住居跡出土遺物(1)	第20図	調査区内出土遺物分布図
第8図	2号住居跡出土遺物(2)	第21図	調査区内出土遺物(縄文1)
第9図	3A号住居跡	第22図	調査区内出土遺物(縄文2)
第10図	3A号住居跡出土遺物(1)	第23図	調査区内出土遺物(弥生・古墳・古代)
第11図	3A号住居跡出土遺物(2)	第24図	調査区内出土遺物(中世)
第12図	3B号住居跡・出土遺物(1)	第25図	特殊遺物(土・石・ガラス製品)
第13図	3B号住居跡出土遺物(2)		

表 目 次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表	第10表	調査区内出土遺物観察表(古墳)
第2表	2号住居跡出土遺物観察表	第11表	調査区内出土遺物観察表(古代)
第3表	3A号住居跡出土遺物観察表	第12表	調査区内出土遺物観察表(中世)
第4表	3B号住居跡出土遺物観察表	第13表	調査区内出土遺物観察表(土製品)
第5表	4号住居跡出土遺物観察表	第14表	調査区内出土遺物観察表(装身具)
第6表	5号住居跡出土遺物観察表	第15表	調査区内出土遺物観察表(模造品)
第7表	2号方形周溝墓出土遺物観察表	第16表	調査区内出土遺物観察表(縄文2)
第8表	調査区内出土遺物観察表(縄文1)	第17表	調査区内出土遺物観察表(石製品)
第9表	調査区内出土遺物観察表(弥生)	第18表	調査区内出土遺物観察表(原石)

図 版 目 次

- | | | |
|-------|--------------------------------|--------------------|
| 図版 1 | 遺跡遠景 (南東から) | 北調査区全景 (西から) |
| | 中央調査区全景 (南から) | 南調査区全景 (西から) |
| | 1号住居跡 (南東から) | 1号住居跡遺物出土状況 (西から) |
| | 2号住居跡遺物出土状況全景 (南から) | 2号住居跡全景 (南から) |
| 図版 2 | 2号住居跡貯蔵穴 (南から) | 2号住居跡遺物出土状況 (南から) |
| | 3A号住居跡遺物出土状況全景 (南東から) | 3A号住居跡全景 (南東から) |
| | 3A号住居跡遺物出土状況 (南東から) | 3A号住居跡遺物出土状況 (西から) |
| | 3A号住居跡遺物出土状況 (西から) | 3B号住居跡全景 (南東から) |
| 図版 3 | 4号住居跡全景 (南から) | 5号住居跡全景 (北から) |
| | 5号住居跡遺物出土状況 (東から) | 2号方形周溝墓全景 (南東から) |
| | 1号溝全景 (西から) | 2号溝全景 (東から) |
| | 作業風景 | 調査参加者 |
| 図版 4 | 1号住居跡出土遺物 | |
| 図版 5 | 2号住居跡出土遺物 (1) | |
| 図版 6 | 2号住居跡出土遺物 (2) / 3A号住居跡出土遺物 (1) | |
| 図版 7 | 3A号住居跡出土遺物 (2) | |
| 図版 8 | 3B号住居跡出土遺物 / 4号住居跡出土遺物 | |
| 図版 9 | 5号住居跡出土遺物 / 2号方形周溝墓出土遺物 | |
| 図版 10 | 調査区内出土遺物 (縄文1) | |
| 図版 11 | 調査区内出土遺物 (縄文1・2) | |
| 図版 12 | 調査区内出土遺物 (弥生・古墳・古代) | |
| 図版 13 | 調査区内出土遺物 (中世・土・石・ガラス製品) | |

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境 (第1図)

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源として南流する荒川によって形成された緩やかな南傾斜の扇状地形である。敷島町は扇状地の扇頂部分に位置し、荒川を挟んで対岸は甲府市となる。この一帯の西側には、盆地北西部にそびえる茅ヶ岳によって形成された赤坂台地が南北に延びており、JR中央線付近において終息する。この台地の西側には大河釜無川(富士川)が、また東側には小河川貫川が南流する。

一方、周辺北側はこの扇状地形の背後を担うように片山が東西に伸び、さらに片山の東端から南側へ舌状に湯村山が張り出す。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、しかも南側の盆地に向かって開口し、まるで天然の要害を形成するかのような特殊な地形をおり成している。

このうち、荒川の右岸に位置する敷島町は、町域南北約17km、東西約4kmと南北に細長い町である。本町はおおよそ北部の山間地帯と南部の扇状地域に大別されるが、町域のほぼ8割は標高1,704mを測る茅ヶ岳や曲岳、太刀岡山などの山間地帯(一部丘陵)からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形上にある。東には荒川、西は貫川が流れ、東西を河川で挟まれた地域となる。この扇状地上には、南北に二つの微高地(自然堤防)が走っており、この微高地上に古代からの生活の営みが連続と続いているのである。

2. 周辺遺跡と歴史的背景 (第1図)

近年頻繁に発掘調査が行われている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、金の尾遺跡⑥などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期には稀である埋燬炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれ、1987年の中央高速自動車道建設による第1次調査で住居跡計8軒(前期末1軒、中期7軒)、さらに第4次調査で住居跡1軒と竪穴状遺構1基が確認された。

また、松ノ尾遺跡の第3次調査でも中期中葉にあたる住居跡1軒が確認されているが、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できているのは現在のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡⑥があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。これまでにVI次に渡る調査が行われており弥生時代の住居跡33軒、方形・円形周溝墓24基をはじめ、南北の集落跡を二分すると考えられるV字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物は、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

また、第VI次調査では遺跡の外側を巡るとみられる環濠跡も幅3m、長さ55mに渡って確認されている。

古墳時代 これまで7遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡①などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡(I次)では落込み内から水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点、末法遺跡(II次)では1号住居跡から緑色凝灰岩質の加工途中の管玉1点と剥片類が出土し、該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡(IV・VI次)でも該期の多くの遺物が出土しており、とくにIV次調査では本町で初めての発見と

なる前期の周溝墓が2基確認されている。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、未法遺跡①でそれぞれ住居跡1軒がみられる。

末法遺跡(1次)は1号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種とその量が充実している。

金の尾遺跡(IV次)1号住居跡や御岳田遺跡(1次)2号住居跡でも甕、壺、坏、高坏が出土している。

後期の甲府盆地北西部では、6世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。代表的なものに荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳(4)や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)が存在し、この頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳(千塚・湯村古墳群-甲府市、赤坂台古墳群-双葉町・竜王町)が取り巻くようになる(第1図●印)。

町内においても戦後間もない頃、4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳(29)と大庭古墳(30)が存在するのみである。ちなみに、松ノ尾遺跡の第I・II次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれてきた土砂と考えられる黒色包含層中から須恵器の破片、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏡、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるものがあり、中には災害により流されてしまった古墳もあったと考えられる。

当時の人々が暮らしていたとみられる住居跡は、現在松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、周辺遺跡の発掘状況から比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。とくに、第I、II、V次調査では、住居跡が複雑に重複して確認されており、しかも第II次調査では一辺約7m、第V次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第VII次調査でも一辺約7.7mを測る大型の住居跡が発見されている。

そして、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西部に天狗沢瓦窯(61)が構築され、操業を開始するようになる。出土した瓦や須恵器等から7世紀後半(白鳳期)に位置付けられ、県内最古の瓦窯である。

この時期に併行する集落跡は、松ノ尾遺跡で徐々に確認されてきているが未だその数は少ない状態である。さらに天狗沢瓦窯跡で焼かれた瓦が供給されたであろう寺院跡も残念ながらいまだ発見されていない。

しかし、近年松ノ尾と村統遺跡③で布目瓦などの出土がみられ、今後両遺跡での更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現在もつとも数が多く、住居跡軒数だけでも100軒以上に上る。

これまでの調査成果をみると、奈良～平安時代初め頃にかけての遺構は未だ発見例は少なく、むしろ平安時代中頃～末頃にかけて急激に増加をみせる。10・11世紀ごろの集落跡が主体を占めている。

松ノ尾遺跡⑤はこれまでの7回の調査で住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、次いで周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、未法遺跡①などでその分布の広がりがみられる。

一方、町南部の北側では、山宮地遺跡⑨、原腰遺跡②などがあり、村統遺跡③では調査面積が約300㎡と狭小であったが計36軒の住居跡が発見され、大規模な集落跡の様相を呈することが分かってきている。

各遺跡出土の遺物を見ると、膨大な量の土器と墨書土器をはじめ須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などがある。特殊なものには、松ノ尾遺跡で円面硯(4個体分の破片)、銅製の帯金具などがあり、しかも10～12世紀の早い段階から中国産「貿易陶磁」がもたらされていることが最近明らかとなってきた。器種としては碗、皿、水注などの類が出土している。

平安時代末頃には、原腰遺跡、村統遺跡、松ノ尾遺跡、御岳田遺跡、不動ノ木遺跡などで集落が営まれていた。中でも、松ノ尾遺跡は金銅製小仏像2軀、村統遺跡では銅製小仏像の台座が1軀出土しており、これらはその出土状態や伴遺物、文様・鋳造方法などからおおよそ11～12世紀代の所産とみられている。

中世 該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡⑤と山宮地遺跡⑨の2遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第VII次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土していることから、おそらく平安末～中世初頭の遺構とみられる。この石組遺構の周辺にはピット群があり、近接したピット内から仏像頭部にみられる螺髪1点が発見されている。

第1図 遺跡位置図



- ① 大塚 ② 大塚 ③ 大塚 ④ 大塚 ⑤ 大塚 ⑥ 大塚 ⑦ 大塚 ⑧ 大塚 ⑨ 大塚 ⑩ 大塚
 ⑪ 大塚 ⑫ 大塚 ⑬ 大塚 ⑭ 大塚 ⑮ 大塚 ⑯ 大塚 ⑰ 大塚 ⑱ 大塚 ⑲ 大塚 ⑳ 大塚
 ㉑ 大塚 ㉒ 大塚 ㉓ 大塚 ㉔ 大塚 ㉕ 大塚 ㉖ 大塚 ㉗ 大塚 ㉘ 大塚 ㉙ 大塚 ㉚ 大塚 ㉛ 大塚 ㉜ 大塚 ㉝ 大塚
 ㉞ 大塚 ㉟ 大塚 ㊱ 大塚 ㊲ 大塚 ㊳ 大塚 ㊴ 大塚 ㊵ 大塚 ㊶ 大塚 ㊷ 大塚 ㊸ 大塚 ㊹ 大塚 ㊺ 大塚 ㊻ 大塚 ㊼ 大塚 ㊽ 大塚
 ㊾ 大塚 ㊿ 大塚 1 大塚 2 大塚 3 大塚 4 大塚 5 大塚 6 大塚 7 大塚 8 大塚 9 大塚 10 大塚 11 大塚 12 大塚 13 大塚 14 大塚 15 大塚 16 大塚 17 大塚 18 大塚 19 大塚 20 大塚 21 大塚 22 大塚 23 大塚 24 大塚 25 大塚 26 大塚 27 大塚 28 大塚 29 大塚 30 大塚 31 大塚 32 大塚 33 大塚 34 大塚 35 大塚 36 大塚 37 大塚 38 大塚 39 大塚 40 大塚 41 大塚 42 大塚 43 大塚 44 大塚 45 大塚 46 大塚 47 大塚 48 大塚 49 大塚 50 大塚 51 大塚 52 大塚 53 大塚 54 大塚 55 大塚 56 大塚 57 大塚 58 大塚 59 大塚 60 大塚 61 大塚 62 大塚 63 大塚 64 大塚 65 大塚 66 大塚 67 大塚 68 大塚 69 大塚 70 大塚 71 大塚 72 大塚 73 大塚 74 大塚 75 大塚 76 大塚 77 大塚 78 大塚 79 大塚 80 大塚 81 大塚 82 大塚 83 大塚 84 大塚 85 大塚 86 大塚 87 大塚 88 大塚 89 大塚 90 大塚 91 大塚 92 大塚 93 大塚 94 大塚 95 大塚 96 大塚 97 大塚 98 大塚 99 大塚 100 大塚

山宮地遺跡では、近年15・16世紀代に相当する遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第1次調査ではカワラケや古銭などが出土した竪穴状遺構1基や土坑などがあり、さらに第2次調査において竪穴状遺構4基、土坑14基が発見されている。とくに後者の調査では、竪穴状遺構から計17点の銅製仏具類がまとまって出土している。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の霊場であった金峰山信仰の登山口であったようである。

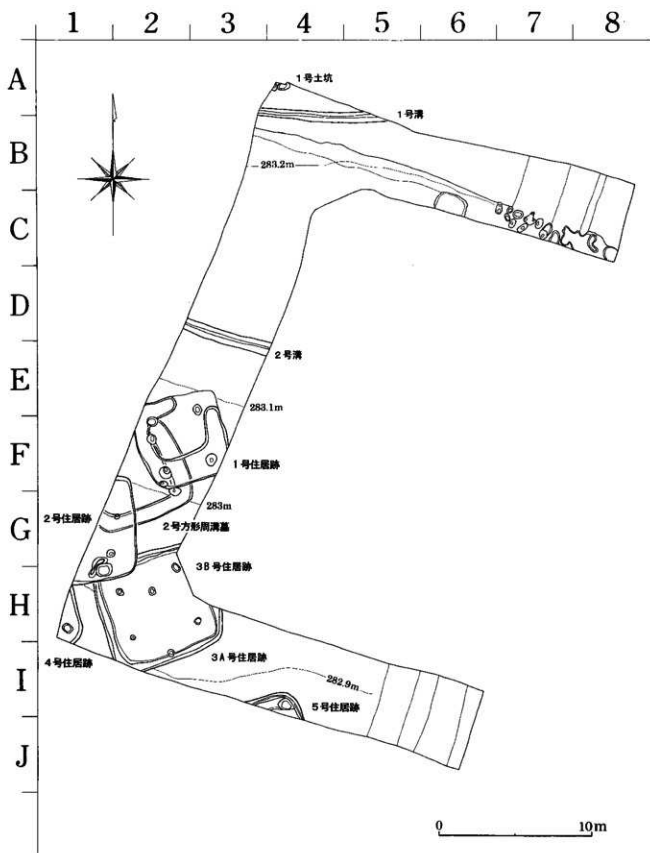
また、第3次調査でカワラケと古銭が埋納された計32基にのぼる土壌墓群も検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきている。

本遺跡の東隣には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部では字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣藏昌恒」屋敷跡(66)が存在したという記述もみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えていく上でも今後重要な地域であるといえよう。

このように、近年の発掘調査の成果によりこれまで判然としなかった敷島町内の各時代の様相が徐々に明らかになりつつある。今回報告する末法遺跡についても、最近の調査で古墳時代前期から中期にかけての集落跡の存在が詳らかになってきた。以下、末法遺跡の第3次調査についてみていきたい。



第2図 調査区位置図



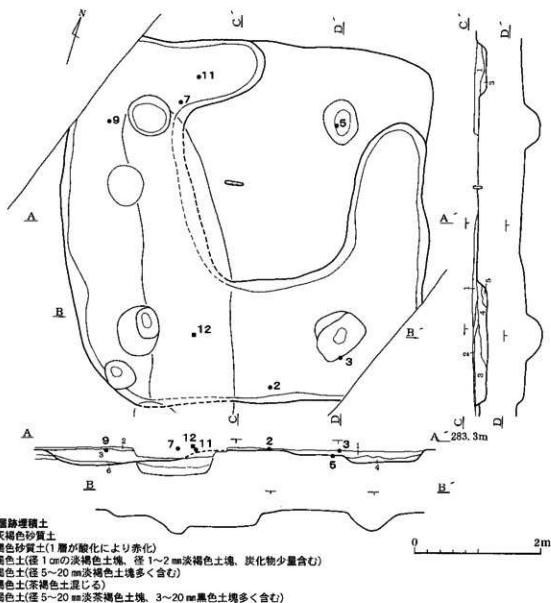
第3图 全体图

第2章 遺構と遺物

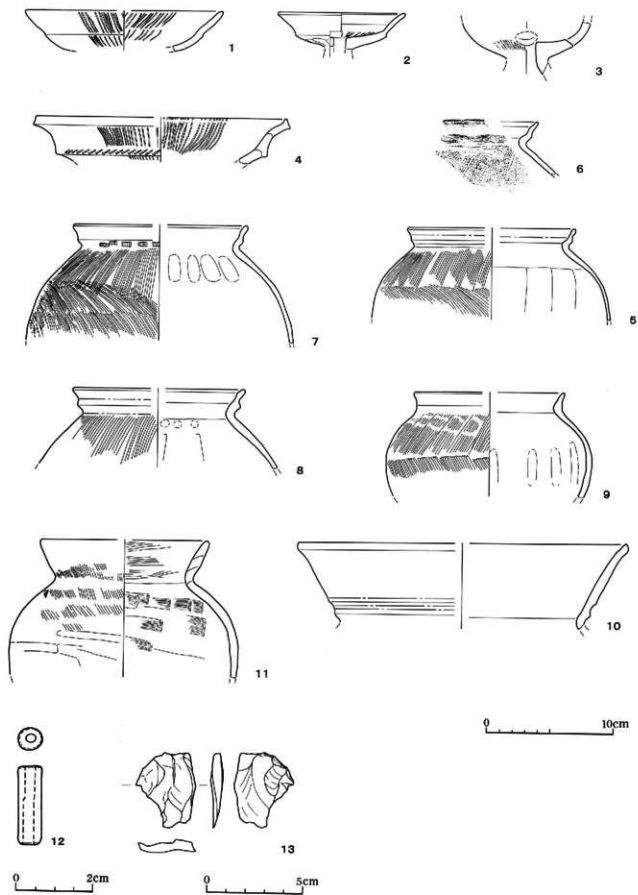
1. 竪穴住居跡

1号住居跡（第4・5図、第1・14・18表、図版1・4・13）

本跡は中央区の中央、E・F-2・3グリットに位置し、上面が削平されている。住居は北西隅、南東隅が調査区外に延び、南西部は2号方形周溝墓を切っている。平面形は隅丸方形で、規模は南北5.8m、東西5.7mである。主軸方位はN-16°-W。床面は軟弱で北東隅が削平された。外周には幅1~2m、深さ11~22cmの溝が廻っている。ただし、溝の埋積土中では貼り床などの痕跡を認めることはできなかった。溝中の四隅に小穴を確認し、柱穴と推定される。大きさは径53~80cm、深さ26~33cmである。中央には長さ30cmほどの川原石が床面に埋め込まれていた。周囲に焼土は認められなかったものの、川原石に被熱の痕跡が認められたことから炉と推察される。遺物は北壁際の確認面付近で土師器台付甕(7)、甕(11)、南側で土師器器台(2)が出土した。また、管玉(12)が南西側の埋積土上層から出土した。遺物は遺構上面を覆う包含層より多くの土師器小片が出土したが、遺構の埋積土中からの出土は僅かであった。



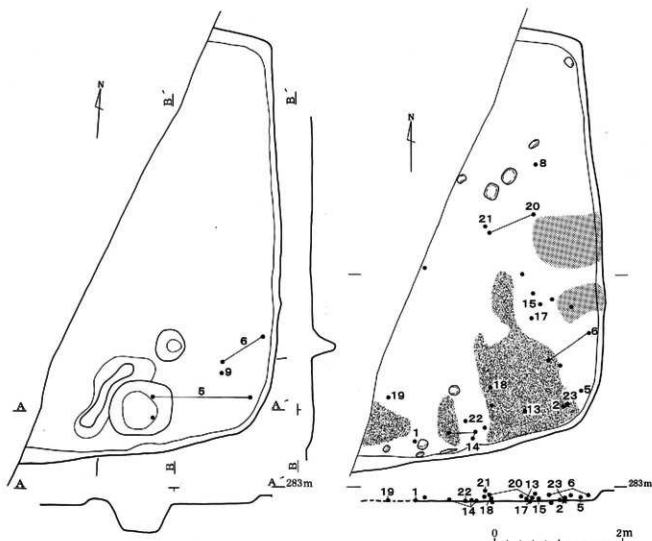
第4図 1号住居跡



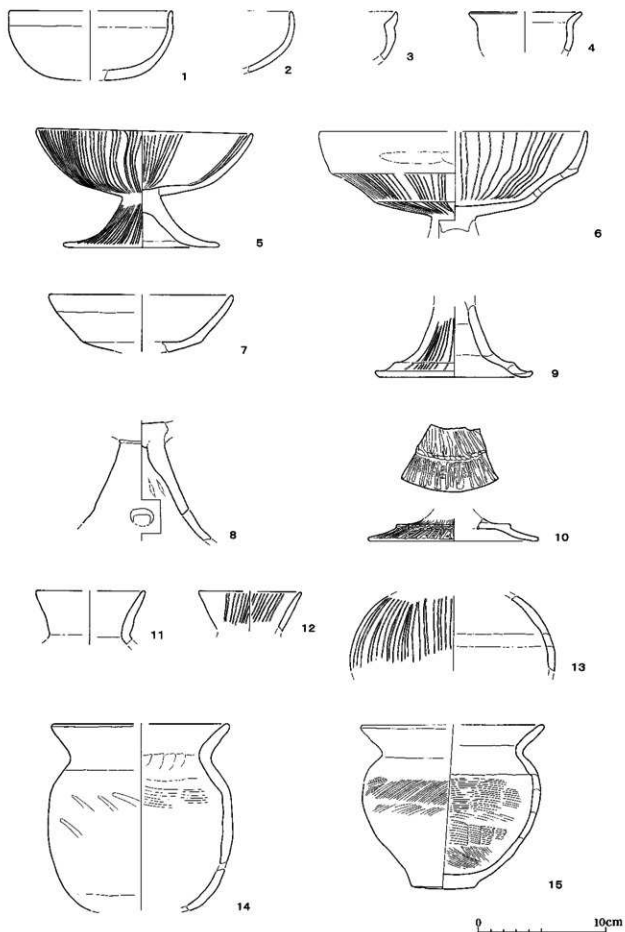
第5图 1号住居跡出土遺物

2号住居跡 (第6~8図、第2・14表、図版1・2・5・6・13)

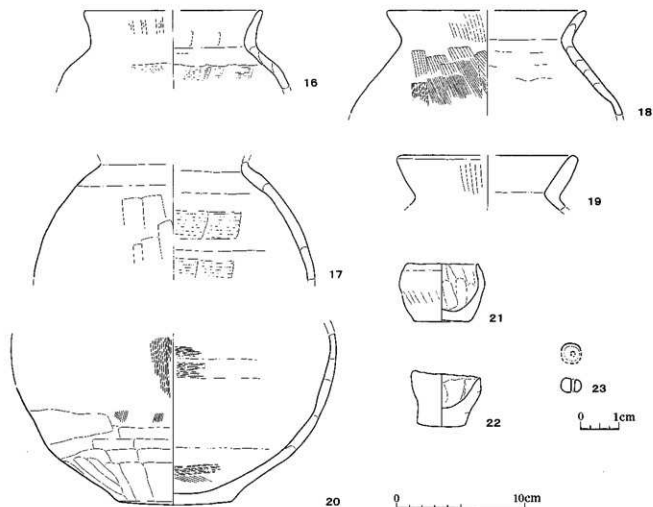
本跡は中央区の南西隅、G・H-1・2グリッドに位置し、3A号住居跡と2号方形周溝墓を切っている。また、4号住居跡と接するも調査区内では新旧を確認することはできなかった。全体の約2分の1が西側調査区外にあるため全容を認めることができなかった。平面形は北東隅が直角に近く丸みを持たないが隅丸方形と推定される。規模は南北6.5mで東西は南壁で3.7mを確認した。主軸方位はN-5°-W。確認面からの深さは13~15cmで壁は緩やかに外反する。床面は硬化面を認めることができず、表面はやや凹凸があるもののほぼ平坦であった。南東側で柱穴と推定される小穴を確認した。大きさは径45cm、床面からの深さ48cmである。柱穴の南西側には貯蔵穴が設けられ、平面形は方形、大きさは100×90cm、深さ46cmである。また、貯蔵穴の西側に幅35~40cm、高さ8cmの隆帯が認められる。住居跡の埋積土は暗灰褐色土の単層で径5~10mmの淡黄褐色土塊を少量含んでいる。また、東壁側中央には多量の焼土を確認し、南側の床面では炭化物が認められた。炭化物は細片化しており、大形の炭化材は認められなかった。ここから出土した遺物は多少の火・熱を受けていた。本跡は焼土・炭化物・遺物の状況から、住居廃絶後に火災にあったものと推定される。遺物は、高坪(5)は坏部が南東隅の床面より出土し、脚部が貯蔵穴より出土した。また、南東隅の炭化物層下から半分に欠けたガラス小玉(23)が出土した。



第6図 2号住居跡



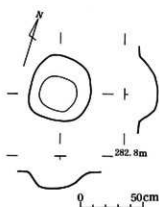
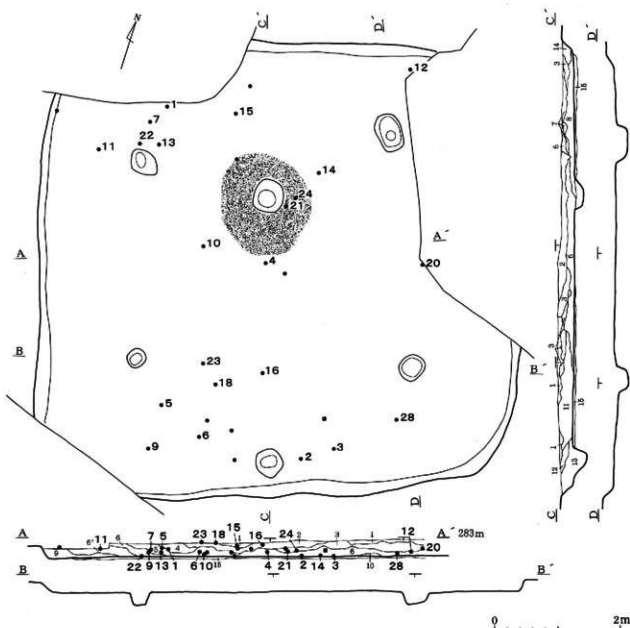
第7图 2号住居跡出土遺物(1)



第8図 2号住居跡出土遺物(2)

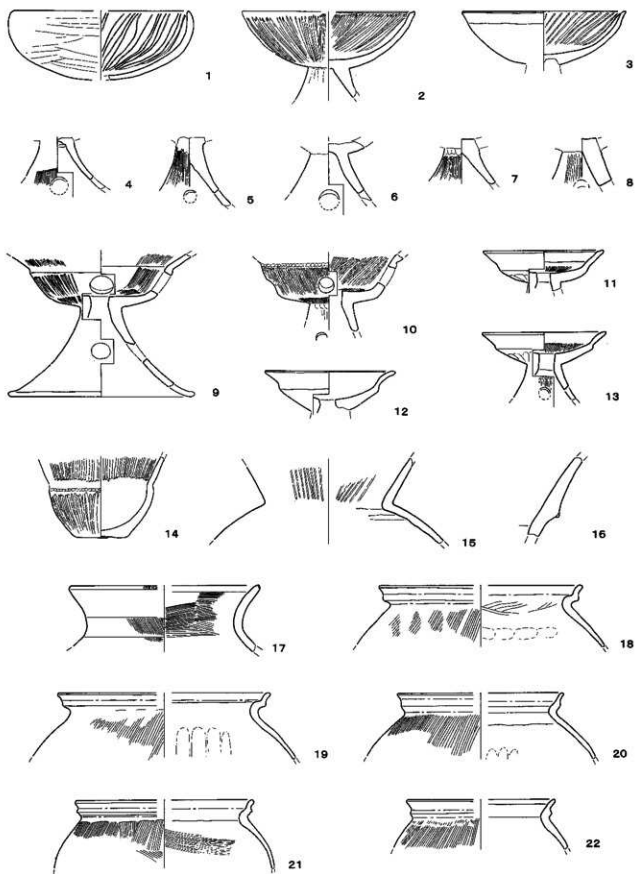
3A号住居跡(第9~11図、第3・17表、図版2・6・7・13)

本跡は中央区の南端、南区の西端、G~I-1~3グリットに位置し、2号住居跡に切られている。また、下位には建て替え前の3B号住居跡が重複している。平面形は北西隅が2号住居跡に切れ、北東・南西隅が調査区外であるが、ほぼ隅丸方形と推測される。規模は南北7.3m、東西7.6mと今次調査で確認した最大のものである。主軸方位はN-18°-W。確認面からの深さは平均18cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は3B号住居跡を埋めて造られ、厚さ2~4cmほどの貼り床が認められた。また、3B号住居跡にかかる部分以外のところでは地山を掘り残している。床面の状況はほぼ平坦で、貼り床部分が硬化している。床面には柱穴が4口、南側中央には出入り口部と推定される小穴1口を確認した。柱穴は径30~40cm、深さ19~47cm。出入り口部の小穴は径45cm、深さ20cmである。また、中央北寄りに径50cm、深さ14cmの掘り込みを確認した。その位置から炉と考えられるが、焼土や焼けて硬化した部分は認められなかった。この掘り込みの周囲、径150cmの範囲の床面上に炭化物を確認した。埋積土は淡褐色土を含んだ灰茶褐色土を主体とし、人為的埋め戻しが東側から行われたものと判断された。遺物の多くは床面直上と床面上10cmから出土し、破損品が多く完形品は認められなかった。遺物の中には多少の火・熱を受けた物があることや埋積土中に炭化物がやや多く含まれることから、住居廃絶後に住居内で廃材を燃やすような行為があったものと推察される。



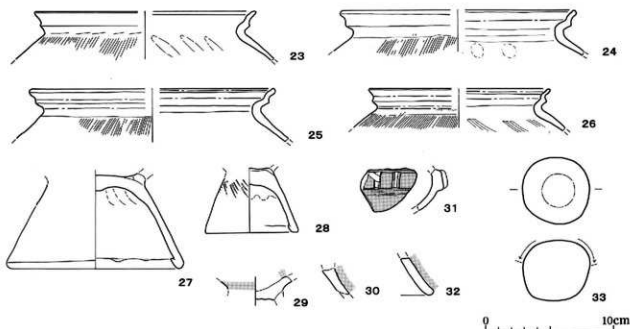
- 3 A号住居跡横土
1. 暗灰褐色砂質土 (白色粗砂、径3~5mm淡褐色土塊を多く含む)
 2. 暗灰褐色砂質土 (径5~10mm淡褐色土塊少量、淡褐色斑、炭化物が多く下位に堆積する)
 3. 暗灰褐色砂質土 (径3~10mm淡褐色土塊多量、灰色砂少量含む)
 4. 暗灰褐色砂質土 (白色粗砂多く、径2~3mm淡褐色土塊、径5mm黒色土塊少量含む)
 5. 暗灰褐色砂質土 (径10~15mm淡褐色土塊多く、径10mm黒色土塊少量含む)
 6. 灰茶褐色砂質土 (径3~5mm淡褐色土塊少量、炭化物若干、灰色砂少量含む)
 6. 灰茶褐色砂質土 (径3~5mm淡褐色土塊少量含む)
 7. 黒色砂質土
 8. 灰茶褐色砂質土 (6層に比べ淡褐色土塊がやや少ない)
 9. 灰茶褐色砂質土 (6層に比べ粒子が少なく、やや暗い)
 10. 灰茶褐色砂質土 (炭化物多く含む)
 11. 灰茶褐色砂質土 (径3~10mm淡褐色土塊多量、炭化物少量含む)
 12. 灰茶褐色砂質土 (径10~15mm淡褐色土塊多量に含む)
 13. 灰茶褐色砂質土 (粒子少なく、炭化物多い)
 14. 黒色砂質土
 15. 暗灰褐色土 (径10~20mm淡褐色土塊多く含む、貼り床)

第9図 3A号住居跡



0 10cm

第 10 图 3 A 号住居跡出土遺物 (1)



第11図 3A号住居跡出土遺物(2)

3B号住居跡(第12・13図、第4・18表、図版2・8・13)

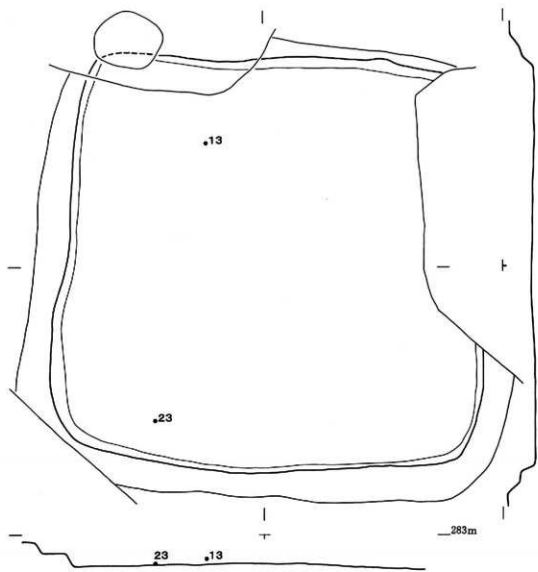
本跡は中央区の南端、南区の西端、G-I-1~3グリットに位置する。3A号住居跡の建て替え前の住居である。3A号住居跡と同じく北西隅が2号住居跡に切れ、北東隅が調査区外に延びている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北6.6m、東西6.8mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面より深さ45cmである。床面はほぼ平坦で、中央付近を中心に硬化面が広がっていた。住居の北側と東側で掘り方が確認でき、北側では床面より7cmほど掘り込み、黒色土で埋め戻されていた。柱穴、出入り口部の小穴、炉などは認められなかった。埋積土は暗茶褐色土を主体としている。東側では暗茶褐色土と淡褐色土が交互に堆積し、人為的な埋め戻しが行われたと判断される。

4号住居跡(第14図、第5・17表、図版3・8・13)

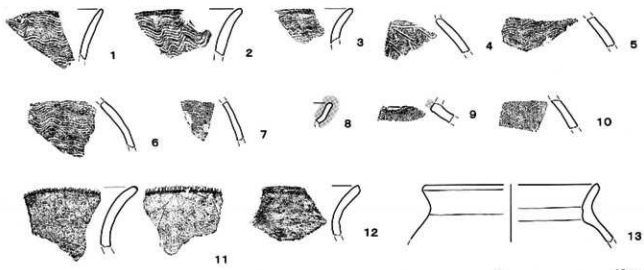
本跡は中央区の南東隅、H-1グリットに位置する。大部分が調査区外にあるため、平面形・規模共に不明である。平面形は南東隅の形状から推して隅丸方形と考えられ、大きさは南北3.8m、東西1.6mを確認した。住居東壁はやや外傾して立ち上がり、深さは34cmである。床面には硬化面は認められなかったもののほぼ平坦である。南西隅で小穴を確認し、貯蔵穴と推定する。径58×64cmの楕円形で、深さ57cmである。埋積土は暗茶褐色土・茶褐色土で、自然堆積である。遺物は貯蔵穴内部の中位から土師器の甕(7)の体部片が出土し、同一個体の口辺部片(6)が調査区際の確認面付近より出土した。その他の遺物はほとんどが1層中からの出土である。

5号住居跡(第15図、第6表、図版3・9)

本跡は南区の中央、I-J-3・4グリットに位置し、住居跡の北東隅を確認し、大部分は調査区外に延びている。住居跡は南北2.3m、東西3mを確認し、平面形は隅丸方形と推察される。確認面からの深さは平均26cmで、壁は垂直に立ち上がる。壁下に壁溝が認められ、幅20~30cm、深さ5~10cmである。床面は調査区壁際で確認し、ほぼ平坦である。壁際には溝状の掘り込みが認められ、壁溝上場より幅85cm、床面より深さ14cmである。北東隅では楕円形の掘り込みを確認し、大きさは径80×85cm、深さ17cmである。埋積土は灰褐色土・暗茶褐色土・茶褐色土である。特に12、13、14層は淡褐色土塊を多く含む埋め戻し状態を示していた。遺物は北東隅の掘り込み部分の埋積土中位より、土師器の台付甕(6)が破片の状態で纏まって出土した。

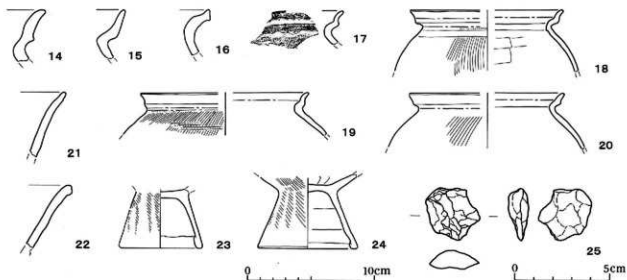


0 2m

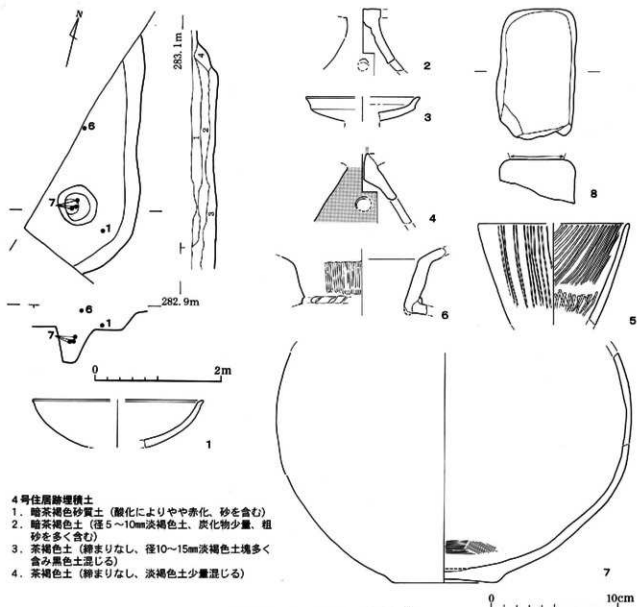


0 10cm

第 12 图 3B 号住居跡・出土遺物 (1)



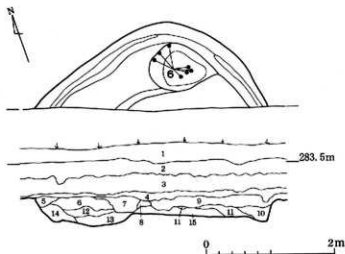
第13図 3B号住居跡出土遺物(2)



4号住居跡埋積土

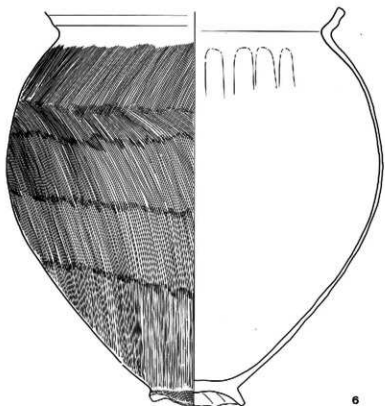
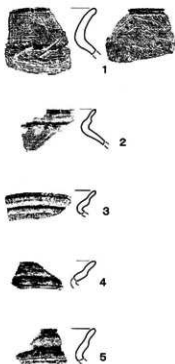
1. 暗茶褐色砂質土 (酸化によりやや赤化、砂を含む)
2. 暗茶褐色土 (径5~10mm淡褐色土、炭化物少量、粗砂を多く含む)
3. 茶褐色土 (練まりなし、径10~15mm淡褐色土塊多く含む黒色土混じる)
4. 茶褐色土 (練まりなし、淡褐色土少量混じる)

第14図 4号住居跡・出土遺物



5号住居跡埋積土

1. 暗灰褐色土 (現耕作土)
2. 暗灰褐色土 (締まる、酸化により赤化する、径3~6mmの礫を含む)
3. 暗灰褐色土 (締まる、1層よりやや明るい、厚さ1~2cmの砂 (径0.2~2mm) の層が3枚堆積する)
4. 暗灰褐色土 (3層に比べやや酸化による赤化が認められる)
5. 暗灰褐色土 (やや粘性のある黒色土塊を多く含む、若干酸化による赤化が認められる)
6. 茶褐色土 (締まりが強い、径2~5mm淡褐色土塊を少量、炭化物を若干含む)
7. 暗灰褐色土 (4層より暗く、径0.5~1mmの砂を若干含む)
8. 灰褐色土 (締まりがない、径0.5~1mm淡褐色土を若干含む)
9. 灰褐色土 (締まりがない、径2~5mm淡褐色土塊、炭化物少量、0.5~1mmの砂が混じる)
10. 灰褐色土 (締まりがない、9層よりやや明るい、径5mm淡褐色土塊多く含む)
11. 茶褐色土 (径5~10mm淡褐色土塊、黒色土を多く含む)
12. 暗茶褐色土 (径2~3mm淡茶褐色土塊、炭化物少量含む)
13. 暗茶褐色土 (径5~10mm淡褐色土塊、炭化物含む)
14. 暗茶褐色土 (径5~10mm淡褐色土塊、径2~4mm黒色土塊多量に含む)
15. 茶褐色土 (黒色土多く、径10mm淡褐色土少量含む)



第15図 5号住居跡・出土遺物

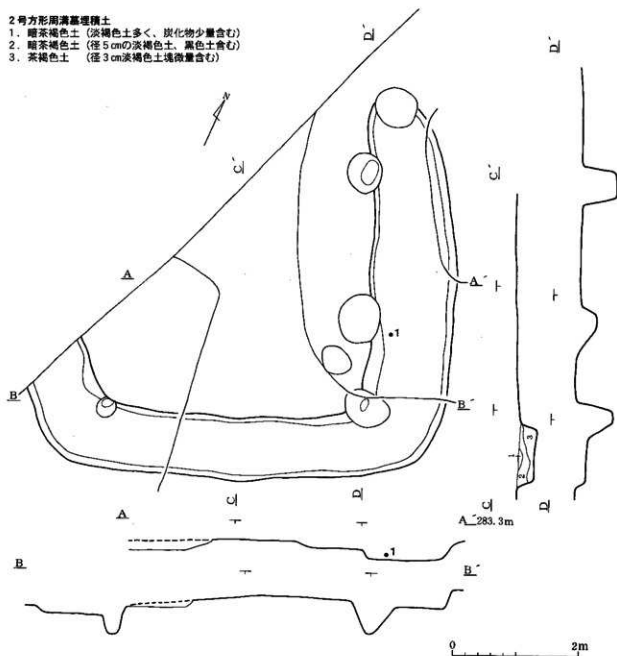
2. 方形周溝墓

2号方形周溝墓 (第16・17図、第7表、図版3・9)

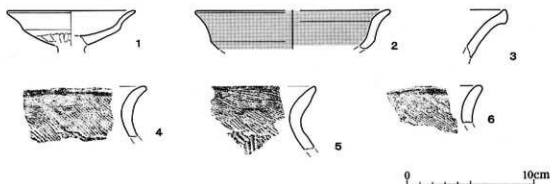
本跡は中央区の中央南寄り、F・G-1〜3グリットに位置し、西側の約1/2が調査区外に延びている。北東が1号住居跡、南西は2号住居跡に切れられ、中央より南側は旧耕作により削平されていた。平面形は隅丸方形で、南北推定6.3 m、東西6.7 mである。主軸方位はN-23°-W。外周には幅1〜1.4 m、深さ17〜31 cmの溝が廻り、北東隅は切れている。ただし、北・西側は調査区外で確認できなかった。北東側は1号住居跡に、南西隅は2号住居跡に切れられ、壁の立ち上がりは不明である。この溝の三方の隅で小穴を3口確認し、大きさは径30〜55 cm、深さ48〜59 cmである。位置から住居の柱穴とも考えられる。上面が削平されていたことから、遺物はそのほとんどが元位置を留めてはいなかったが、器台の受け部(1)が東側の溝内より出土した。

2号方形周溝墓埋積土

1. 暗茶褐色土 (淡褐色土多く、炭化物少量含む)
2. 暗茶褐色土 (径5 cmの淡褐色土、黒色土含む)
3. 茶褐色土 (径3 cm淡褐色土塊微量含む)



第16図 2号方形周溝墓

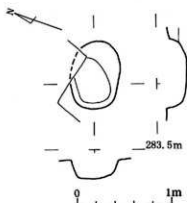


第17図 2号方形周溝基出土遺物

3. 土坑

1号土坑 (第18図)

本跡は北区の北西隅、A-4グリットに位置し、西側に小穴が隣接する。平面形は楕円形、規模は上面73×52 cm、底面47×35 cm、深さ21 cmである。壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋積土は暗茶褐色土で淡褐色土粒、炭化物を少量含んでいる。西側に隣接する小穴と共に遺構は調査区外に延びている為、その性格は不明である。また、試掘調査において2号住居跡出土の埴(7-2)と同種の土師器埴が出土している。



第18図 1号土坑

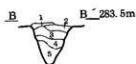
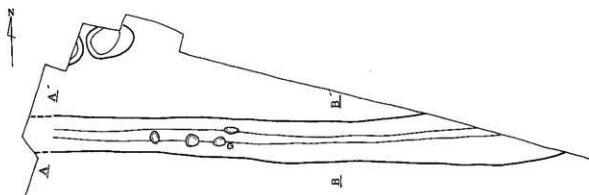
4. 溝

1号溝 (第19図、図版3)

本跡は北区の北端A-3~5、B-3~5グリットに位置し、両端は東西の調査区外に延びている。北側約1 mに1号土坑が隣接する。長さは8 mを確認し、上幅55~75 cm、下幅10~20 cm、深さ40~60 cmで、断面はV字状をしている。本跡は淡褐色土(地山)を掘り込み、底面は西から東に向かって傾斜している。ただし、A4グリットの長さ1.5 mの間は砂礫層が露出していた。埋積土は径5~10 mmの淡褐色土、黒色土の塊を含んだ締まりの無い暗褐色土を主体とする自然堆積である。なお、水流の痕跡を示すような堆積物は認められなかった。

2号溝 (第19図、図版3)

本跡は中央区の中央、D~E-2~4グリットに位置し、両端は東西の調査区外に延びている。長さは5.7 mを確認し、上幅75~85 cm、下幅8~20 cm、深さ43~52 cmである。断面はV字状をしている。底面は西から東に向かって緩く傾斜している。埋積土は砂で酸化により赤化していた。遺物は縄文土器片、弥生土器片、土師器片が出土しているが、埋積土の状況からいずれの遺物も本遺構に伴わないものと判断される。

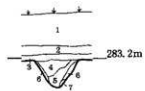
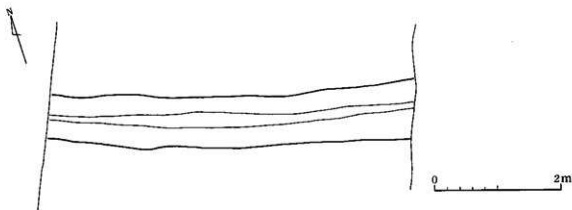


1号溝埋積土 A-A'

1. 灰褐色砂質土 (包含層)
2. 暗褐色土 (径10mm黑色土塊少量含む)
3. 暗褐色土 (径3~5mm淡褐色砂質土多く含む)

1号溝埋積土 B-B'

1. 灰褐色砂質土 (包含層)
2. 黒色土 (炭化物少量含む)
3. 暗茶褐色砂質土 (径2~4cm淡褐色土塊多く含む)
4. 淡褐色土 (径5~10mm黑色土塊少量含む)
5. 暗褐色土 (径5~10mm黑色土塊、淡褐色土含む)



2号溝埋積土

1. 表土
2. 暗灰褐色土 (砂粒多い)
3. 灰褐色土 (粘性あり、砂粒を少量含む)
4. 灰色砂 (酸化シオレンジ色をする、径0.4~1mm粗砂を少量含む)
5. 灰色砂 (灰褐色土を含む)
6. 灰褐色土 (粘性強い、淡褐色土塊含む)
7. 黒色土 (粘性ややあり)

第19図 1・2号溝

第3章 その他の出土遺物

本調査区では、古墳時代の集落が廃絶した後、耕作による切土整地が行われた。その覆土中には縄文時代から中世に至る種々多様な遺物が包含されている。第20図は第21～24図に図示した遺物のグリッド毎の出土状況を表したものである。南に向かって緩く傾斜する地形を切土整地しているため、遺物は調査区の南半部に集中している。以下に概要を記し、個々については表記した。

縄文 縄文時代の遺物は前期から後期初頭にかけてのものが出土している。第21図の1～6は諸磯式期、7～12は烙沢式期、13～27は勝坂式期、28～44は曾利式期、45は称名寺式期の土器である。第22図の1～4は石鏃、5は石鏃の未製品とも思われたが重さ・形状から小型石匙とした。6は調整痕の認められるフレーク、7～13は打製石斧、14は磨石、15は石皿である。8の打製石斧は刃部が黒く変色し、顕著な使用痕を残している。11～13の打製石斧は両端を欠損している。

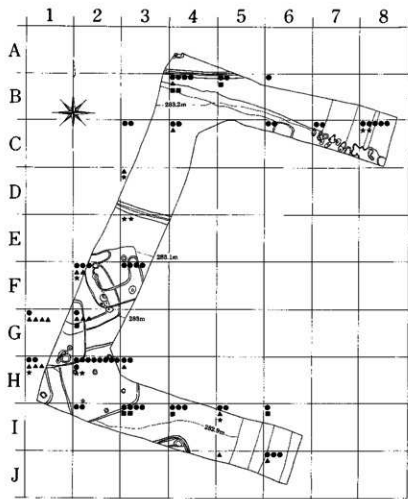
弥生 1～3の口辺部と8の上端に波状文を施している。3・8の頸部には横直文、7は簾状文が施されている。4～6の口縁部はキザミが施される。9～13は体部に波状文が施される。11は割れ口の左右に擦られた痕跡があり、砥石として再利用されたものと推定される。14～18は赤彩されている。

古墳 2は頸部外面に陸帯を貼り付け、クシ状工具による交互の刻みを意匠している。3・4は外面にクシ状工具により横位の「ハ」の字状文が施されている。

古代 埴類(2～4)は底部へラ起して、3の底部は壘状の圧痕が認められる。5はいわゆる甲斐型土器で、内面と高台内面にミガキが施される。9は壘で口辺部外面に稜を持つようなタイプは8世紀代よりあらわれる。

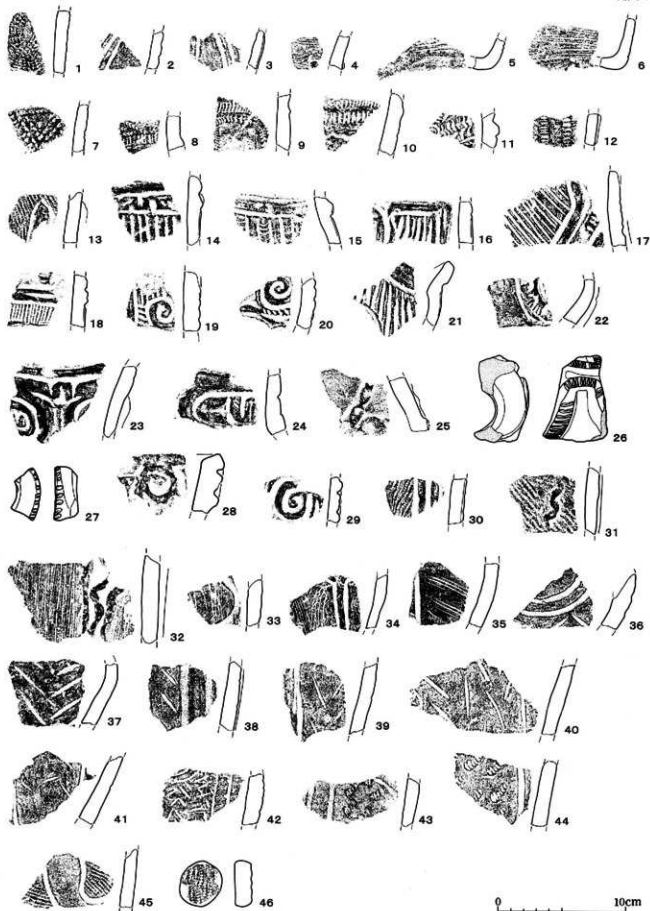
中世 土師器皿(1)はロクロ成形で、体部が内湾ぎみに立ち上がり口辺部がやや外反し、いくぶん厚手の作りをする。2は瀬戸産、3～5・11・12は美濃産、9は常滑産、8・10は在地産、6・7は舶載の磁器である。2・3・4・12は灰釉、5・11は鉄釉。6は白磁のIV類、7は高麗青磁。舶載の磁器は11世紀中頃から12世紀、そのほかは15世紀から16世紀初頭のものである。

特殊遺物 1は下端部にナデが施され、上端に剥離痕が認められる。台部の破片かと思われるが、器形は不明である。2は重り部分を欠損した分銅形土製品と考えられる。3は土師器壘の頸部を円形に成形して作られた円盤である。4は剣形石製模造品で、穿孔に2度も失敗するなど製作に不慣れな点が認められる。5は緑色凝灰岩、6は鉄石英で、ともに装身具の原石である。5は弥生時代の玉造の技法による剥離痕が認められる。



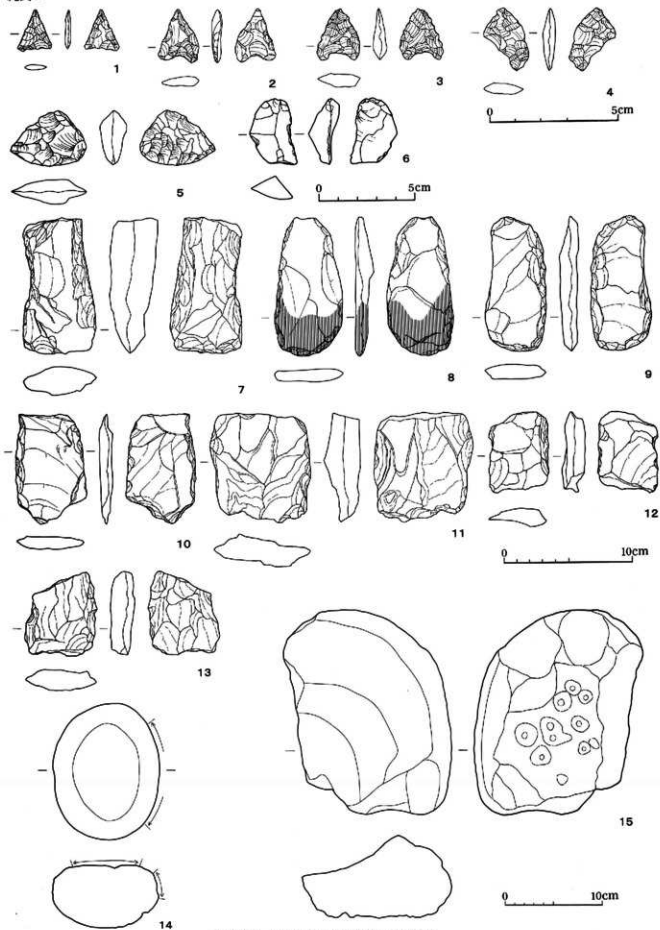
● 縄文 ▲ 弥生 ■ 古代 * 中世

第20図 調査区内出土遺物分布図



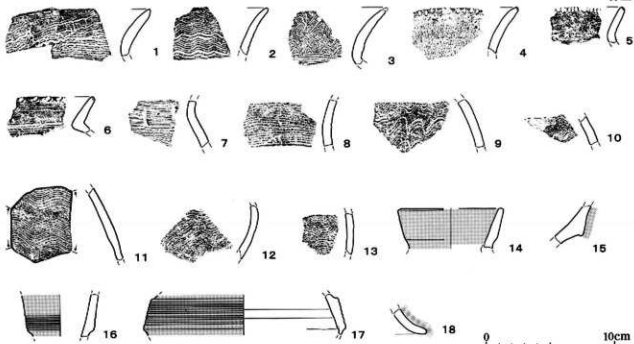
第 21 圖 調査区内出土遺物 (縄文 1)

縄文 2

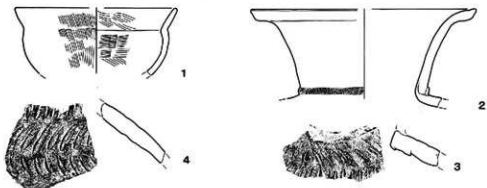


第22図 調査区内出土遺物(縄文2)

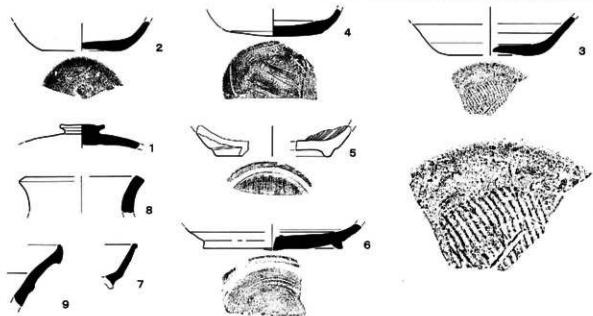
弥生



古墳

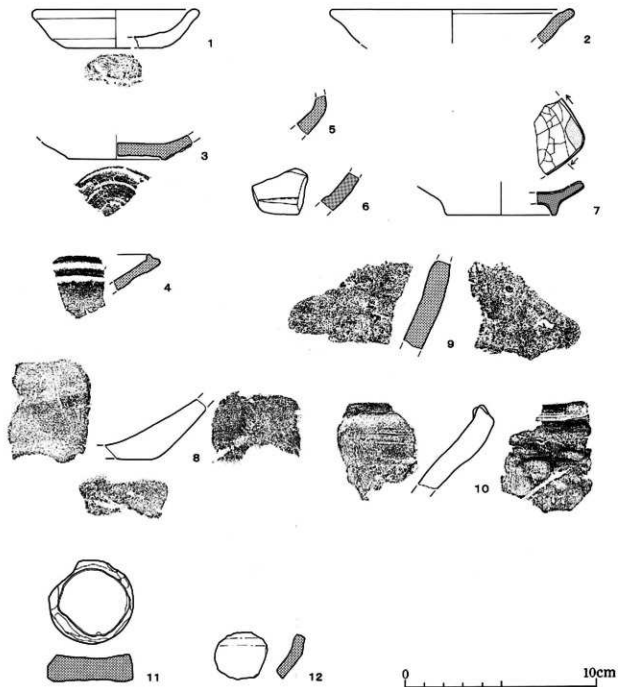


古代

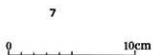
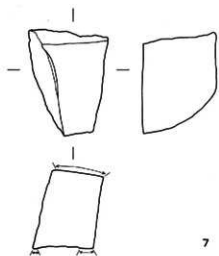
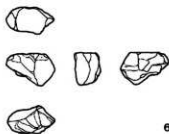
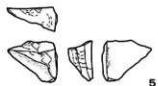
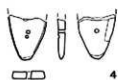
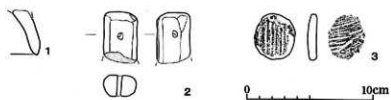


第23图 調査区内出土遺物(弥生・古墳・古代)

中世



第 24 图 調査区内出土遺物 (中世)



第25図 特殊遺物（土・石・ガラス製品）

第4章 まとめ

今次調査区の主体は古墳時代前期の集落跡である。その他、縄文時代前期から中世にわたる遺構・遺物を確認した。そこで、若干であるが各時代の概要を以下に略記する。

縄文時代

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。今回の調査で得られた資料は旧耕作による二次堆積層からの出土で調査区内に遺構を想定できるものではなかった。出土した遺物は、前期諸磯式期をはじめ、中期猪沢式期、勝坂式期、曾利式期、後期称名寺式期に及んでいる。この中で、曾利式期の土器の出土量が最も多く、また、石鏃、打製石斧、磨石、石皿などの石器類の出土も比較的豊富である。よって、今次調査では遺構を確認することはできなかったが、末法遺跡内に縄文時代の人々の定住を示す遺構が存在することが予測される。

弥生時代

今次調査では縄文時代同様、遺物は出土したが遺構を認めることはできなかった。出土した遺物の大半は後期のもので、赤彩された土器の中には北陸系のもの(第23図 弥生16、17)も含まれる。これらの資料から末法遺跡内にも遺構の存在が推定でき、また、今次調査で確認された古墳時代前期へ移行する時期のものとして重要である。

古墳時代

確認した遺構は住居跡6軒、方形周溝墓1基である。また、埋積土の状況から判断される1号溝、試掘調査で古墳時代の土器が出土した1号土坑も同時代のもものと推定される。当地域において古墳時代前期の時期を決める上で重要なポイントとなる遺物にS字状口縁台付甕(以後、S字甕とする。)がある。当地域のS字甕については小林健二氏の詳細な分類があり、これを参考にする。以後、小林分類・口類と銘記する。

住居跡 6軒を確認した。そのうちS字甕の出土した住居跡は1・3A・3B・5号住居跡である。1号住居跡出土のS字甕は口辺部の外反が緩く、内面上端に沈線を持つものが認められる。また、体部上半のヨコハケが認められず、ハケメのみである。(小林分類・Ⅲ類) そのなかでも10は特に口辺部上半の間隔が広く山陰系の口辺を呈している。(小林分類・Ⅲe類) 3A号住居跡出土のS字甕は口辺部が外傾し内面上端に沈線を持ち、体部上半部に最大径を持つ大ぶりのものと、口辺部がやや立ち上がり、体部中位に最大径をもつ小ぶりのものが混在している。3号B住居跡出土のS字甕(19)は口辺部がやや外傾し、体部にヨコハケが認められる。5号住居跡出土のS字甕(6)は口辺部上半と台部を欠損するが、口辺部中段が大きく発達した山陰系の大形品と推定される。(小林分類・Ⅲe類) その他、S字甕の出土してない住居については、2号住居跡の境(2)は内傾傾向にある。高坏(5)の脚部が短脚傾向にあり、高坏(6・9・10)は坏部・脚部に段を有する。また、文様を意図したミガキが施された遺物(5・6・9・10・12・13)が認められる。4号住居跡はS字甕が出土していないもの高坏(1)の形状が3A号住居跡のものに類似するため、平行関係にあるものと推定される。

次に住居間の切り合い関係を整理すると、2号住居跡は3A号住居跡・2号方形周溝墓を切っている。3A号住居跡は3B号住居跡が建て替わっている。また、5号住居跡はほとんどが調査区外にあるが外周に掘り込みを持つ形態が類似し、方向も一致する。

方形周溝墓 1基を確認した。2号方形周溝墓は全体の半分ほどが調査区外に有り、上面が削平されていたため確認できたのは周溝のみである。周溝は北東隅が途切れている。また、周溝内側の隅の三方(もう一方は地区外)に小穴が確認された。調査当初、方形周溝墓を想定した遺構はこれを含め3基であった。しかし、1号方形周溝墓(1号住居跡)は溝が廻りながらその中に柱穴が確認され、中央から出土した川原石が火・熱を受けていたことからこの川原石を炉石と判断し、住居跡に変更した。また、5号住居跡も当初は方形周溝墓とも思われた。しかし、北辺に周溝状の掘り込みは持つものの、東辺には壁溝と考えられるものがあり全体に掘り込まれマウンドが判然としなため、1号住居跡と同形態の住居と判断した。以上のことから2号方形周溝墓については形状から方形周溝墓と判断したが、住居跡の可能性も捨てきれない。

以上、古墳時代の遺構について概略を記してきたが最後に各遺構の時期について『山梨県史資料編2』を参考に説明を加える。小林分類・Ⅲe類のS字甕を持つ5号住居跡はⅡ期(4世紀中葉)、これと平行関係にあるのが1号住居跡である。3A号住居跡はS字甕の形状や伴うほかの遺物との関係からⅢ期(4世紀後半～5世紀前半)、3B号住居跡は弥生土器やS字甕など多様な遺物が出土しているが、3A号住居跡が建て替えであることから、さほど時間差のないものと判断される。2号住居跡はS字甕を含まず、高坪の形状と遺構の切り合いから判断して本集落で最も新しいⅥ期(5世紀中葉)と判断される。また、4号住居跡は確認した遺構の規模が小さいことと遺物の量が少ないことから判断に苦しむところであるが、3A号住居跡との関係からⅢ期(4世紀後半～5世紀前半)としたい。2号方形周溝墓は遺構の切り合い関係からⅢ期と考えられる。また、遺構は調査区の南西隅に集中して確認されたことから、集落の中心は本調査区の南西方向と考えられる。

土器以外の古墳時代の遺物として管玉(1住)、ガラス小玉(2住)などの装身具やその原石が住居跡や調査区内から出土した。第Ⅱ次調査でも同様の石材(珪化凝灰岩)が出土していることから、集落内における玉の生産は想像に難無くない。

古 代

今次調査では遺構を確認することはできなかった。図示した遺物はほとんど8世紀代のものであるが、敷島町内ではこれまで該期の遺構の調査例が少なく判然としない。本遺跡の北方に境を接する松ノ尾遺跡は平安時代前期後半から後期を中心とした集落とされるが、これまで調査された部分が遺跡の推定範囲の中央部より北側に限られている。過去の調査でこの時期の住居が確認されており、遺跡の中央から南側に奈良時代の遺構の存在が推察される。したがって、今次調査で出土した8世紀代の遺物は地形的に見て本遺跡内に帰属すべき遺構を想定するよりは松ノ尾遺跡からの流れ込みと考える方が妥当と思われる。

中世以降

今次調査で中世と断定できる遺構は確認されなかった。しかし、縄文から中世までの遺物を包含する耕作痕やそれに切られる2号溝は、当初近世以降のものと思われたが、その上層に数回にわたって河川の氾濫を受けた痕跡が認められたことや近世以降の遺物を含まないことから近世より下るものと判断される。耕作痕の覆土より出土した中世遺物は土師質土器、瀬戸・美濃の陶器片、船載の磁器(白磁・高麗青磁)などである。遺物の時期は国内産の土師質土器や陶器片が15世紀から16世紀初頭、船載の磁器は11世紀中頃から12世紀である。建物跡のような明確な遺構を確認できず、中世遺物の所属をはっきりと掴みきれないが耕作痕や2号溝が近世以前のものであれば出土遺物から15～16世紀と想定される。国内産と船載の磁器の間にはやや時間のずれは有るものの船載の磁器は数が少なく伝世品の破片(特に高麗青磁は破損した後、割れ口を擦って再利用した痕跡が認められる)と判断され、支障はないものと考えられる。

また、今次調査で出土した船載の磁器のうち1点は器形・色調などから高麗青磁と判断したが、山梨県下では明野村深山田遺跡より13世紀後半から14世紀中葉の梅瓶の破片4点が出土しているに過ぎず、検討を要するやもしれない。

以上の如く今次調査では、古墳時代前期の集落を確認することができた。また、縄文から中世にかけての出土遺物によって、遺構は確認されなかったものの近隣にこれらの時代に属する遺構の存在を推定できた。

敷島町においてはこれまで埋蔵文化財の発掘調査は町の担当職員によって行われてきた。しかし、近年調査件数の増大に伴って、はからずも調査を担当することになった。

本書を上梓するにあたり調査から報告書作成まで御指導・御助力を賜った多くの方々々に感謝申し上げる所である。

参考文献

- 山梨県 1999『山梨県史資料編2 原始・古代2』
中山誠二 1993「甲斐系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小林健二 1993「外来系から在来系へ—甲斐のS字甕の変遷—」『研究紀要』9 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『研究論集』4 九州歴史資料館

第1表 1号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	CCK	土師器	杯	(15.4)	1/3		内外面に文様を意図したミガキが施される。	赤褐色	密	
				3.2						
2	F6	土師器	器台	10.0	受け部1/2	受け部外面に彫刻を施す。口辺部は外反する。	口辺部ナブ、受け部外面のケズリ、内面は特殊のミガキ。	褐色	良	
				2.9						
3	P7	土師器	器台		受け部1/2		受け部内外面ミガキ、台部外面ケズリ。	暗褐色	緻密	受け部に小孔が認められる。内面に煤が付着し、火熱を受ける。
4	DK	土師器	壺	(19.6)	口辺部1/5	口辺部外面中程に段を有し、口縁部は直立する。	内外面に文様を意図したミガキが施される。外面の段にケン状工具による刻状が施される。	茶褐色	緻密、金雲母	
				3.6						
5	P8	土師器	台付甕	(13.0)	体部上半1/3	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。口縁部は下縁状とする。	口辺部工具によるナブ、体部外面ハケム、内面磨削ヘアナブ。	外：茶褐色、内：灰褐色	金雲母	外面に煤が付着。
				7.2						
6	B区	土師器	台付甕		口辺部片	口辺部外面中程に段を有し、口辺部内面上位に段を持つ。	口辺部工具によるナブ、体部外面ハケム、内面磨削ハナ。	褐色	粗く、金雲母を含む。	
				(13.5)						
7	P2	土師器	台付甕	9.3	体部上半1/3	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。	口辺部ナブナゲ、体部外面ハケム、内面磨削の掛ナブ。	茶褐色	粗砂・金雲母多く含む。	
				9.3						
8	DK	土師器	台付甕	(13.3)	口辺部片	口辺部外面中程に段を有し、やや外傾する。口辺部内面上位に沈線を持つ。	口辺部工具によるナブ、体部外面ハケム、内面磨削ハナ、磨削ヘアナブ。	茶褐色	粗砂・金雲母多く含む。	
				6.2						
9	P4	土師器	台付甕	(11.0)	体部上半1/3	口辺部の下部は肥厚し、やや立ち上がる。	口辺部ナブナゲ、体部外面ハケム、内面磨削のナブ。	茶褐色	粗く、金雲母を含む。	
				8.3						
10	P-D区	土師器	台付甕	(26.0)	口辺部片	口辺部は外傾し、外面に2条の段を持つ。	口辺部外面ナブ、内面磨削の細いミガキ。	外：黒褐色、内：褐色	密・金雲母	外面に煤が付着。
				6.5						
11	P1	土師器	壺	(13.2)	体部上半1/3	口辺部は外傾する。	口辺部外面ナブ、内面コハケのちナブ、体部外面上位段のハケム、下位段のケズリ、内面ヘアナブ。	赤褐色	粗砂多く、粗い、金雲母、石英	火熱を受ける。
				10.9						

第2表 2号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P20	土師器	埴	(12.0)	1/3	口辺部はほぼ垂直で、底面はやや丸底である。	口辺部ナブ、体部外面ケズリ。	褐色	粗い	
				5.5						
2	P23	土師器	埴		体部片	口辺部はやや内傾、底面はやや丸底。	口辺部ナブ、体部外面ケズリ、底面磨削ミガキ、内面に特殊の文様を意図したミガキが施される。	褐色、底面黒色	粗砂	3号住居と同一製法。
3	CCK	土師器	埴		体部片	口辺部内面に段を持ち、口辺部は短く外湾する。	口辺部ナブ、体部外面ケズリ、内面ナブ。	赤褐色	密	
4	新堀穴	土師器	埴	(9.0)	体部片	口辺部は外反する。		赤褐色	緻密	火熱を受ける。
				3.1						
5	P14, 28	土師器	高杯	16.8	完形	杯部外面に幅かに段を持ち、口辺部に向かって外傾する。脚部は「八」の字状に開く。	脚部内面ケズリ、底面ナブ、外面全体及び杯部内面は「1」字状に文様を意図したミガキが施される。	赤褐色	密	脚部は火熱を受け黒く焦っている。
				9.5						
				12.0						
6	P11, 21	土師器	高杯	20.8	杯部1/2	体部外面に段は認められ、口辺部は短く内湾する。	口辺部外面ナブ、体部外面及び、内面全周に文様を意図したミガキが施される。	褐色	緻密	火熱を受け、内面に煤が付着する。
				8.1						
7	B区	土師器	高杯	(14.2)	杯部1/5	体部外面に段を持ち、口辺部は外傾する。	口辺部外面粗いミガキ、内面ナブ。	赤褐色	緻密	火熱を受ける。
				4.5						
8	P1	土師器	高杯		脚部1/3		脚部外面ミガキ、内面上位ナブ、下位段のケズリ。	褐色	密	3口の孔。火熱を受ける。
9	P1	土師器	高杯	5.6	脚部1/3	脚部外面に段を有し、「八」字状に開く。	内面上位段のケズリ、下位ナブ、外面に文様を意図したミガキが施される。	赤褐色	密	火熱を受ける。
				(12.4)						

10	B区	土師器	高坏	1.8	胴部片	胴部外面に縁を有し、開く。	外面に文様を意匠したミガキが施される。内面トナナド。	褐色	やや粗い	
				(13.4)						
11	A区	土師器	小形壺	3.9	口辺部片	口辺部は外縁する。	外面ミガキ。	赤褐色	密、赤色粒	火熱を受け。
				(8.3)						
12	B区	土師器	小形壺	3.1	口辺部片	口辺部は外縁する。	内外面に文様を意匠したミガキが施される。	赤褐色	密	火熱を受け。
				(8.1)						
13	P24	土師器	小形壺		体部片1/3	体部は球形である。	体部外面に縁の文様を意匠したミガキが施される。	赤褐色	密	
				(14.0)						
14	P 12,18 19,26	土師器	壺	14.8	1/3	口辺部は「く」の字状に外縁し、体部はやや長胴である。	口辺部ナド、体部外面ヘラケズリ、内面縁のヘラナド、足部内面指ナド。	外：茶褐色、内：灰褐色	粗い	
				(14.0)						
15	P8	土師器	壺	13.0	1/2	口辺部は「く」の字状に外縁し、胴部が球形で、足部は平底である。	口辺部ナド、体部外面ヘケム、内面コハク、足部内面ケズリ。	褐色、一部黒色	粗い、3mmほどの織を含む。	火熱を受け、変形する。
				(14.0)						
16	A区 床下	土師器	壺		口辺部片		口辺部外面ヘケのちナド、内面下位縁のヘラナド、体部外面ヘケム、内面コハク。	褐色	やや粗い	
				(15.4)						
17	P9、 野塚 穴	土師器	壺		体部上半 1/3	胴部は球形とする。	体部外面ヘラケズリ、内面縁のヘラナド。	褐色	粗い、石英	
				(15.4)						
18	P1、 15	土師器	壺	8.2	体部上半 1/3	体部上半に最大径を持ち、口辺部は「く」の字状に外縁する。	口辺部外面ヘケムのち横ナド、内面コハク、体部外面ヘケム、内面コハク。	暗褐色	粗砂	外面に煤が付着。
				(13.4)						
19	P21	土師器	壺	4.1	口辺部片	口辺部は「く」の字状に外縁する。	口辺部外面ヘケムのちナド。	外：暗褐色、内：灰白色	粗砂、石英	外面に煤が付着。
				(13.4)						
20	P2,4	土師器	壺	13.6	体部1/2	体部が球形をし、胴部はやや丸みである。	体部外面中位ヘケム、下位及び底部ヘラケズリ、内面ヘケム。	外：灰白色、内：暗褐色	やや粗い、6mmほどの織を含む。	
				8.9						
21	P3	ミニチュア土師器		5.5	2/3		口辺部ナド、内面指ナド。	褐色、一部黒色	粗砂、白色粒	
				4.6						
22	P16	ミニチュア土師器		5.1	完形		内面指ナド。	褐色、一部黒色	やや粗い	
				4.5						
				3.7						

第3表 3A号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P6	土師器	埴	13.89	1/2	半球形をし、口辺部は若干内縁する。	外面縁のミガキ、内面縁の文様を意匠したミガキが施される。	外：黒色、内：褐色	密、赤色粒、金雲母	2号付2号同一個体。
				5.5						
2	P26	土師器	高坏	13.0	2/3	坏部は半球形をし、口縁部内面に縁を持つ。胴部は大きく「八」の字状に開く。	口辺部ナド、外面縁のミガキ、内面縁のミガキ。	赤褐色	密	胴部コナド。
				7.0						
3	P27	土師器	高坏	13.0	坏部完形	坏部は半球形をし、口縁部内面に縁を持つ。	口辺部ナド、内面に文様を意匠したミガキが施される。	赤褐色	密	
				4.3						
4	P15	土師器	高坏		胴部1/2	胴部は「八」の字状に開く。	胴部外面上位ケズリ、下位ミガキ、内面縁のケズリ。	赤褐色	普通、赤色粒若干	胴部は3口の小孔。火熱を受け。
				(14.2)						
5	P19	土師器	高坏		胴部1/2	胴部は柱状から開く。	外面ミガキ、内面縁のケズリ。	褐色	普通	3口の小孔が認められる。
				(14.2)						
6	P21	土師器	高坏		胴部1/2	胴部は「八」の字状に開く。	胴部外面上位ケズリ、内面縁のケズリ。	褐色	普通、金雲母	胴部は3口の小孔。
				(14.2)						
7	P4	土師器	高坏		胴部1/3	胴部は大きく「八」の字状に開く。	坏部内面ミガキ、脚部上縁ケズリ、ミガキ、内面縁のケズリ。	褐色	普通、赤色粒若干	3口の小孔が認められる。
				(14.2)						
8	D区	土師器	高坏		胴部上下	胴部はやや柱状とする。	外面ミガキ。	暗褐色	やや粗い、金雲母	小孔。
				(14.2)						
9	P30	土師器	厨台	11.6	受け部1/2	受け部外面に縁を持ち、台部は大きく「八」の字状に開く。	受け部内面ミガキ、台部トナナド。	褐色	密、赤色粒若干	受け部と台部にそれぞれ3口の小孔が認められる。
				(14.2)						

10	P14	土銅器	器台		受け部・台部	受け部外面に段を持ち、台部は大きき「八」の字状に開く。	受け部内外面がキ。	褐色	底、赤色粒土質	受け部に4口、右部に3口の孔が認められる。
				9.5 3.0						
11	P2	土銅器	器台		受け部形状	受け部外面に段を持ち、口辺部が外傾し、口縁部内面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ、内面は滑らかなミガキ。	外：赤褐色、内：黒色	底、金雲母	
				10.2 3.4						
12	P10	土銅器	器台		受け部形状	受け部外面に段を持ち、口辺部が外反する。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ。	赤褐色	底	火・熱を受ける。
				9.6 5.2	1/2					
13	P5	土銅器	器台			受け部外面に段を持ち、口辺部は外傾する。	口辺部ナデ、体部外面ケズリ、内面は滑らかなミガキ、台部外面がキ、内面はヘラケツ。	褐色	底	台部に推定口の孔。
				6.4 3.9						
14	P11	土銅器	小形壺		口辺部欠	口辺部は外傾、体部は球形をし、底面は平肌。	口辺部内外面、体部外面滑らかなミガキ、底部外面滑らかなミガキ。	褐色	底	
				6.1		体部上半1/3	口辺部は外傾し、体部は球形である。	褐色	底	火・熱を受ける。
15	P8	土銅器	壺				口辺部が外面がキ。	褐色	底	火・熱を受ける。
					破片	口辺部中央に段が認められる。	底部内面滑らかなミガキ。	褐色	底、金雲母若干	火・熱を受ける。
16	P25	土銅器	壺							
				(14.8) 5.3		口辺部片	口辺部は大きく外反し、口縁部はキザキを持つ。	口辺部外面ナデ、下位ハケム、内面は滑らかなミガキ。	褐色	やや粗い、白色の底土
17	C区	土銅器	壺							
				(15.7) 4.8		口辺部1/4	口辺部外面中段に段を持ち、口辺部はやや外反する。	口辺部工具によるナデ、体部外面ケズリの粗いハケム、内面は滑らかなミガキ、口縁部は滑らかなミガキ。	褐色	普通、金雲母
18	P18	土銅器	台付壺							
				(16.6) 5.1		口辺部片	口辺部外面中段に段を持ち、やや外傾する。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケム、口縁部は滑らかなミガキ。	褐色	普通、金雲母
19	B区	土銅器	台付壺							
				(13.0) 5.1		口辺部1/3	口辺部外面中段に段を持ち、やや外傾する。	口辺部ナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	褐色	粗い、金雲母
20	P29	土銅器	台付壺							
				(13.8) 5.1		口辺部1/4	口辺部外面中段に段を持ち、口縁部は外傾する。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	赤褐色	普通、金雲母
21	P13	土銅器	台付壺							
				(11.6) 3.8		口辺部片	口辺部外面中段に段を持ち、口縁部内面に段を持つ。口辺部下段が外傾する。	口辺部ナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	褐色	普通、金雲母
22	P3	土銅器	台付壺							
				(17.1) 5.5		口辺部1/4	口辺部外面中段に段を持ち、口縁部内面に段をもつ。	口辺部工具によるナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	赤褐色	普通、金雲母
23	P17	土銅器	台付壺							
				(18.2) 3.2		口辺部片	口辺部外面中段に段を持ち、口縁部内面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	赤褐色	普通、金雲母
24	P12	土銅器	台付壺							
				(18.9) 4.9		口辺部1/5	口辺部外面中段に段を持ち、口縁部内面に沈凹が認められる。	口辺部ナデ、体部外面ハケム。	褐色	底、金雲母
25	C区	土銅器	台付壺							
				(14.0) 3.2		口辺部片	口辺部外面中段に段を持ち、やや外傾する。口縁部内面に沈凹が認められる。	口辺部ナデ、体部外面ハケム、内面は滑らかなミガキ。	褐色	普通、金雲母
26	D区	土銅器	台付壺							
				7.5 (13.2)		台部1/2	台部は「八」の字状に開き、底部内面に折痕が認められる。	体部外面ハケム。	褐色	普通、金雲母
27	D区	土銅器	台付壺							
				5.2 7.5		台部形状	台部は「八」の字状に開き、底部内面に折痕が認められる。	台部外面ハケム。	赤褐色	普通、金雲母
28	P28	土銅器	台付壺							
						破片	台部内外面がキ、底部内面滑らかなミガキ。	褐色	粗い	外部内外面赤色
29	D区	弥生	高坏							
						破片	脚部外面上位に4本の沈凹が認められる。	茶褐色	普通	外面赤色
30	C区	弥生	高坏							
						破片	体部外面に横の隆帯が付き、これに2本の縦帯がレズ。	外面がキ。	暗褐色	底
31	A区	弥生	壺							
						破片	外面がキ。	褐色	粗い	外面赤色、小孔
32	B区	弥生	器台							

第4表 3B号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考	
1		DE区	弥生			口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通、金雲母少量	
2		CE区	弥生			口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	
3		AE区	弥生			口辺部片	口辺部は外傾する。	外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	
4		DE区	弥生			破片		外面1位横の波状文、下位波状文、内面ヘラナデ。	褐色	普通	
5		AE区	弥生			破片		外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通	外面に煤が付着。
6		AE区	弥生			破片		外面波状文、内面ミガキ。	褐色	普通	外面上部に煤が付着。
7		CE区	弥生			破片		外面波状文、内面ミガキ。	暗褐色	普通	
8		CE区	弥生			口辺部片	口辺部は外傾し、中間に段を持つ。口縁部土層欠けである。		赤色	普通	内外面赤紅。
9		CE区	弥生			破片		体部外面波文、内面ヘラナデ。	褐色	普通	口辺部内外面赤紅。
10		CE区	弥生			破片		体部外面波文、内面ヘラナデ。	褐色	普通	
11		DE区	土師器			口辺部片	口辺部は多少の外傾する。	口辺部上位ナデ、外面下位横のヘラナデ、内面横のヘラナデ、口縁部ミガキ、口縁部外傾。	褐色	普通、金雲母少量	
12		AE区	土師器			口辺部片	口辺部は外傾する。	口辺部上位ナデ、下付ヘケム。	淡褐色	やや粗い、石灰質、石炭、長石	大熱を受ける。
13		PI	土師器		(13.6) 4.3	口辺部片	口辺部は外傾する。	口辺部ナデ、体部内面横のケズリ。	赤褐色	粗い、金雲母、1〜2mm多量	大熱を受ける。
14		AE区	土師器			口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	ナデ。	褐色	粗い	
15		CE区	土師器			口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	ナデ。	褐色	粗い	
16		CE区	土師器			口辺部片	口辺部は外反し、口縁部土盛りする。	内面ナデ、外面下位ヘケム、内面横のケズリ。	褐色	やや粗い	
17		AE区	土師器			口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ヘケム、口コハク。	暗褐色	普通、金雲母	
18		AE区	土師器		(11.9) 4.8	口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ヘケム、内面ヘラナデ。	赤褐色	普通、金雲母	
19		AE区	土師器		(12.9) 3.3	口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ヘケム、口コハク。	暗褐色	普通	
20		BE区	土師器		(12.0) 4.3	口辺部片	口辺部外面に段を持つ。	口辺部ナデ、体部外面ヘケム。	赤褐色	やや粗い、金雲母	
21		DE区	土師器			口辺部片	口辺部は外傾する。口縁部外面に波状が認められる。	内面ナデ、ミガキ。	褐色	良、金雲母	外面に煤が付着。
22		AE区	土師器			口辺部片	口辺部は外傾し、口縁部外面に波状が認められる。	内面ナデ。	外：黒色、内：褐色	普通、金雲母少量	
23		P2	土師器			台盤形状	台盤は「八」の字状に開き、底部が凹み形状が認められる。	右側外部の一部コハク。	赤褐色	やや粗い、金雲母	

24	CEC	土銅器	台付甕	6.2	台部成形	台部は「八」の字状に開き、底部は扁平す。	外面ハケム、内面ヘラナド。	赤褐色	普通、金雲母	
				5.8						
				8.0						

第5表 4号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P9	土銅器	高坏	13.2	1/4	杯部は半球形をし、口縁部内面に段を持つ。	口辺部ナブ、内外面ミガキ。	褐色	密	火熱を受ける。
				3.8						
2		土銅器	高坏		隅部1/2	脚部は大きく「八」の字状に開く。	外面ミガキ、内面横のケズリ。	暗褐色	普通	小孔が認められる。火熱を受ける。
3		土銅器	器台	9.8	受け部1/4	体部外面二段を持ち、口辺部は外反する。		赤褐色	密	表面が磨かれている。火熱を受ける。
				2.9						
4		土銅器	器台		右部1/4	台部は大きく「八」の字状に開く。	内面横のケズリ。	外面：赤赤、内面：黒褐色	やや粗い、石英、金雲母	3口の穿孔。
5		土銅器	甕	11.8	口辺部1/4	口辺部はやや外傾して立ち上がる。	内外面に文様を模したタガキが施される。	褐色	密、赤色粒若干	
				8.1						
6	P5	土銅器	壺		口辺部片	やや外傾して立ち上がり、中段で大きく外反する。頸部に粘土紐を繫ぎ付け、その上から斜めの溝が引かれる。	外面ハケムのちミガキ、内面ミガキ。	褐色	粗く、長石、金雲母を含む。	
7	P5, 7	土銅器	甕	18.2	体部1/2	体部球形をし、底部はやや平らである。	体部外面上位コハク、口部ミガキ、下位部ケズリ、内面ヘラナド、下部ハケム、底部ケズリ。	淡褐色	粗い、長石、金雲母	6と同一個体。
				8.0						

第6表 5号住居跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1		土銅器	甕		破片	口辺部は「く」の字状に外反する。	口辺部ナブ、体部外面ハケム、内面コハク。	褐色	細砂、金雲母	
2		土銅器	台付甕		破片	口辺部外面に段を持ち、外傾する。	口辺部ナブ、体部外面ハケム。	褐色	細砂、金雲母	
3		土銅器	台付甕		破片	口辺部外面二段を持ち、外傾する。	口辺部ナブ。	褐色	細砂、金雲母	
4		土銅器	台付甕		破片	口辺部外面二段を持ち、外傾する。	口辺部ナブ。	黒褐色	細砂	外面に溝が付き、
5		土銅器	台付甕		破片	口辺部外面二段を持ち、外傾する。	口辺部ナブ。	暗褐色	細砂、石英	
6	P1~7	土銅器	台付甕	31.8	体部1/2	口辺部下端に二条の段を持ち、体部は上位に最大径を持つ。	口辺部ナブ、体部外面ハケム、内面横のケズリ、台部外面ハケム、内面ナブ。	褐色	細砂、金雲母	口辺部と、台部の穴開いたのち、2次使用される。

第7表 2号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	寸法(cm)	遺存部位	器形の特徴	整形の特徴	色調	胎土	備考
1	P1	土銅器	器台	10.0	受け部1/3	体部外面に段を持ち、口辺部は外反する。	口辺部ナブ、体部外面ケズリ、内面ミガキ。	褐色	密、赤色粒	内面が凹み、
				2.7						
2		土銅器	高坏	15.2	口辺部1/5	体部外面に段を持ち、口辺部は外反する。	内外面ミガキ。	赤色	密	内外面が平ら。
				3.1						
3		土銅器	甕		口辺部片	口辺部は外反する。		褐色	粗い、1~2mm砂多し。	火熱を受ける領域。
4		土銅器	甕		口辺部片	口辺部は大きく外反する。	口辺部上位ナブ、外面下位ハケム、内面横のミガキ。	褐色	粗い、2~3mmの砂少量含む。	

5	土師器	甕		口辺部片	口辺部は大きく外反する。	口辺部上位ナゲ、外面下位ハウス、内面コハウス。	暗褐色	粗い、3~4mm 磁石を含む。
6	土師器	甕		口辺部片	口辺部は外反する。	上位ナゲ、下位ハウス、内面コハウス。	暗褐色	やや粗い、1~2mmの穴あり。

第8表 調査区内出土遺物観察表(縄文1)

番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)	部位	彫刻・施文(外)	整形(内)	色調	胎土	備考
1	C-3Cr	縄文	深鉢		体	結核状施文		茶褐色	石英、金雲母	
2	3山B区	縄文	深鉢		体	沈線文		外: 褐色、内: 黒色	磁石多、 粗砂	
3	2山A区	縄文	深鉢		体	沈線文		褐色	粗砂	
4	3山B区	縄文	深鉢		体	平行沈線文・点状文		茶褐色	黒雲母少量	
5	F-2Cr	縄文	深鉢		底部	平行沈線文		褐色	黒雲母多量	
6	B-4Gr	縄文	深鉢		底部	平行沈線文		外: 黄褐色、 内: 黒色	黒雲母	
7	B-4Gr	縄文	深鉢		体	三角刺突文		茶褐色	粗砂、金雲母	
8	1山A区	縄文	深鉢		体	三角刺突文、押引付文		褐色	粗砂、黒雲母	
9	I-6Cr	縄文	深鉢		体	三角刺突文、押引付文		淡褐色	粗砂	
10	I-3Cr	縄文	深鉢		体	押引付文		淡褐色	粗砂、黒雲母	
11	C-3Cr	縄文	深鉢		体	押引付文、爪形文		茶褐色	粗砂	
12	B-4Gr	縄文	深鉢		体	押引付文		淡褐色	粗砂、黒雲母	
13	B-5Gr	縄文	深鉢		体	縄文		褐色	粗砂	
14	J-6Gr	縄文	深鉢		体	隆帯+交互刺突文、沈線文		淡褐色	粗砂、石英、 雲母	
15	C-9Cr	縄文	深鉢		体	隆帯、沈線文、爪形文		外: 淡黒色、 内: 淡褐色	粗砂、石英、 雲母	
16	B-6Cr	縄文	深鉢		体	沈線文		茶褐色	粗砂、石英	
17	B-5Gr	縄文	深鉢		体	隆帯+沈線文		外: 褐色、内: 黒色	粗砂	
18	1山	縄文	深鉢		体	隆帯、沈線文		茶褐色	粗砂、金雲母	
19	3山B区	縄文	深鉢		体	沈線文		褐色	粗砂、金雲母	
20	J-6Cr	縄文	深鉢		体	沈線文		褐色	粗砂	
21	I-4Cr	縄文	深鉢		口辺	沈線文		褐色	粗砂、雲母	
22	J-6Cr	縄文	深鉢		口辺	隆帯+沈線文		茶褐色	粗砂、金雲母	
23	C-6Gr	縄文	深鉢		体	槽+沈線文(沈線文)		褐色	粗砂、石英、 雲母	
24	C-6Cr	縄文	深鉢		体	槽+沈線文(沈線文)		外: 褐色、内: 灰褐色	粗砂、石英	
25	H-3Cr	縄文	深鉢		体	隆帯+押引文		褐色	粗砂、雲母	
26	I-5Cr	縄文	深鉢		把手	爪形文		茶褐色	粗砂	
27	I-2Cr	縄文	深鉢		把手	刺突文		褐色	雲母	
28	H-2Gr	縄文	深鉢		口辺	隆帯		褐色	粗砂、石英、 雲母	
29	C-8Cr	縄文	深鉢		体	沈線文		外: 褐色、内: 黒色	粗砂、雲母	
30	F-3Cr	縄文	深鉢		体	縄文(単線R)+沈線文		茶褐色	粗砂、雲母	
31	3山B区	縄文	深鉢		体	縄文(単線R)+隆帯		茶褐色	粗砂	
32	H-2Cr	縄文	深鉢		体	条線文+隆帯		外: 黒褐色、 内: 褐色	粗砂、金雲母	
33	G-1Cr	縄文	深鉢		体	沈線文+条線文		白色	粗砂、金雲母	
34	I-5Cr	縄文	深鉢		体	沈線文+条線文		茶褐色	粗砂、石英、 雲母	
35	I-3Cr	縄文	深鉢		体	沈線文		白色	粗砂、石英	
36	1山B区	縄文	深鉢		口辺	沈線文		茶褐色	粗砂、石英	
37	H-1Gr	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		外: 黒色、内: 褐色	粗砂、金雲母	
38	I-4Cr	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		外: 黒褐色、 内: 褐色	粗砂、金雲母	
39	3山B区	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		褐色	粗砂	
40	2山東	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		茶褐色	粗砂	
41	F-2Cr	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		茶褐色	粗砂、石英、 金雲母	
42	B-4Cr	縄文	深鉢		体	「ハ」の字状文		外: 灰褐色、 内: 茶褐色	粗砂、金雲母	
43	H-2Gr	縄文	深鉢		体	沈線文、列点文		褐色	粗砂、石英、 雲母	
44	3山B区	縄文	深鉢		体	沈線文、列点文		暗褐色	粗砂、金雲母	
45	I-3Cr	縄文	深鉢		体	沈線文+縄文(単線R)		淡褐色	粗砂、金雲母	

45	陶文	円盤	3.25	陶文(新石器)		褐色	細砂	
----	----	----	------	---------	--	----	----	--

第9表 調査区内出土遺物観察表(弥生)

番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)	部位	彫形・施文(外)	彫形(内)	色調	胎土	備考
1	I-5Gr	弥生	甕		口辺	波状文		暗褐色	石灰、金灰母	
2	J-6Gr	弥生	甕		口辺	波状文	ナデ	茶褐色	普通、金灰母	
3	G-2Cr	弥生	甕		口辺	波状文、横走文	ミガキ	褐色	やや粗く、金灰母を含む。	
4	H-3Cr	弥生	甕		口辺	ハクス、口縁部キザミ	横ヘラナデ	外:茶褐色、内:褐色	粗砂	
5	G-2Cr	弥生	甕		口辺	口縁部キザミ		黒色	普通	
6	G-1Gr	弥生	甕		口辺	口縁部キザミ	ヘラナデ	褐色	やや粗く、金灰母を含む。	
7	F-2Cr	弥生	甕		胴部	波状文、波状文		茶褐色	普通	
8	B-4Gr	弥生	甕		胴部	横走文、波状文		淡褐色	やや粗く、金灰母を含む。	
9	H-1Gr	弥生	甕		体	波状文	ナデ	外:褐色、内:暗褐色	やや粗く、金灰母を含む。	
10	G-1Gr	弥生	甕		体	波状文		外:黒色、内:褐色	普通	
11	4住	弥生	甕		体	波状文	ミガキ	外:褐色、内:茶褐色	普通	既石として再利用される。
12	H1D区	弥生	甕		体	波状文		暗褐色	粗い	
13	J-6Gr	弥生	甕		体	波状文		暗褐色	やや粗く、灰質を含む。	
14	G-1Cr	弥生	甕	7.80	口辺	ミガキ+赤部		赤色	普通	
15	G-2Cr	弥生	甕		口辺	赤彩		外:赤、内:褐色	粗い	
16	H-1Gr	弥生	細頸甕		口辺	赤彩		外:赤、内:黒色	普通	北越系
17	C-4、G-1Gr	弥生	細頸甕		体	赤彩		外:赤、内:黒色	普通	北越系
18	D-3Cr	弥生	高杯		脚	ミガキ+赤部		外:赤、内:褐色	普通、石灰	

第10表 調査区内出土遺物観察表(古墳)

番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)	部位	彫形・施文(外)	彫形(内)	色調	胎土	備考
1	F-3Cr	土師器	埴	(12.6)	口辺・体	縦ノケツ	ヨコノケ	褐色	粗砂	
2	E-2Cr	土師器	甕	(17.6)	口辺	ミガキ、クシ状工具による刺突		赤褐色	やや粗い、金灰母	穴・熱を受ける。
3	I-3Cr	土師器	甕		体	クシ状工具による刺状文		外:褐色、内:茶褐色	普通、金灰母	
4	H-1Gr	土師器	甕		体	クシ状工具による刺状文	ヨコノケ	外:褐色、内:茶褐色	普通、金灰母	3と同一個体。

第11表 調査区内出土遺物観察表(古代)

番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)	部位	彫形・施文(外)	彫形(内)	色調	胎土	備考
1	I-4Gr	須恵器	甕					灰色	やや粗い、金灰母	
2	B-4Gr	須恵器	埴		体・底部	波部ヘラ彫。		淡灰色	赤、白色粒	
3	I-3Gr	須恵器	埴		体・底部			灰色	赤、黄色粒	
4	B-5Cr	須恵器	埴		底部	縦部ノケツ		黄灰色	赤(赤部内)	既石に「1」ヘラ記号
5	G-2Cr	土師器	高台杯		底部	縦部内縁部、ミガキ	波付状のミガキ	褐色	赤、赤色粒	内内面に大溝、石片を多数に研み出す。
6	B-4Cr	須恵器	高台杯		底部			灰白色	赤	
7	I-4Gr	須恵器	小形高台埴		口辺・体部	口辺部が外縁に研み出す		灰色	赤	
8	I-3Cr	須恵器	甕	(8.7)	口辺			外:黒色、内:暗褐色	赤(赤灰色)	
9	C-3Cr	須恵器	甕		口辺			淡灰色	赤	

第12表 調査区内出土遺物観察表(中世)

番号	出土地点	種別	器種	寸法(cm)	部位	彫形・施文(外)	彫形(内)	色調	胎土	備考
1	E-3Gr	カワラケ	小皿	8.4 / 2.1		ヨコノケ部、底部赤彩		褐色	細砂、金灰母	

2	表	瀬戸	境	12.4	口辺	灰釉			赤褐色	密	
3	E-3Cr	美濃	小塚		底部				茶褐色	密	
4	C-8Cr	美濃	おろし屋		口辺	灰釉			赤褐色	密	
5	D-3Cr	美濃	天貝塚		体部	鉄釉			黒色	密	
6	I-6Cr	白磁	皿		体部				黄白色	密	口縁の類
7	H-1Cr	高麗青磁	碗		底部				青褐色	密	体部の割れ口を際って、傷を 受けている。
8	H-2Cr	土師質 土器	鉢		底部				外、黒褐色、 内、棕色	粗砂	
9	F-2Cr	常滑	甕		体部				水白色	粗砂	
10	I1-3Cr	土師質 土器	片口鉢		口辺	緑のクズリ			外、黒色、内、 褐色	粗砂	
11	表	美濃	戸殿(天日 塚)	4.5	底部		鉄釉		黒色	粗砂	
12	C-8Cr	美濃	戸殿(平 塚)	2.6	体部	灰釉			赤褐色	密	

第 13 表 調査区内出土遺物観察表 (土製品)

番号	出土地点	種別	器種	寸法 (cm)	部位	形状・施文(外)	形状(内)	色調	釉土	備考
25-1		土師器						褐色	緑土、金雲母	
25-2	I-5Cr		分銅形土 製品					茶褐色	粗砂、金雲母	吊り下げの小孔が認められる。
25-3	I-3Cr	土師器	戸殿	3.2	ハケマ	ヨコハケ		淡褐色	粗砂	胴の口辺部の転丸

第 14 表 調査区内出土遺物観察表 (装身具)

番号	出土地点	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
5-12	I住	管玉	2.065	0.6		1.257	滑石片岩	完好	石村社(徳川系)
8-23	2住22	ガラス小玉	0.525		0.375	0.083		半分欠損する。	

第 15 表 調査区内出土遺物観察表 (模造品)

番号	出土地点	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
25-4	I-6Cr	銅製模造品	2.4	2	0.1	2.533	銅製片岩	模元欠損する。	1口の穿れと2口の未穿孔。石材は 波川産。

第 16 表 調査区内出土遺物観察表 (縄文 2)

番号	出土地点	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
22-4	3住35	石鏃	1.635	1.945	0.215	0.308	磨礫石	完好	
22-6	I-4Cr	石鏃	2.12	1.58	0.47	1.313	磨礫石	完好	
22-3	C-8Cr	石鏃	2.02	1.69	0.525	1.334	磨礫石	完好	
22-4		石鏃	2.43	1.71	0.46	1.255	磨礫石	片断欠損	
22-5	H-1Cr	小形石鏃	2.92	2.135	0.26	5.016	磨礫石		
22-6	I-5Cr	フレーク	3.36	2.28	1.175	8.298			調整痕が認められる。
22-7	C-4Cr	打製石斧	10.8	5.7	3.6	274	ホルンフェルス	柄部欠損	
22-8	I住	打製石斧	11	6.2	1.4	94	ホルンフェルス		
22-9	C-8Cr	打製石斧	10.7	4.8	1.4	105	安山岩		
22-10	3住31	打製石斧	8.7	5.5	1	64	粉砂岩	刃部欠損	
22-11	C-7Cr	打製石斧	8.7	7.8	2.8	187		柄部欠損	
22-12	C-8Cr	打製石斧	6.5	4.6	1.7	56	ホルンフェルス	両端欠損	
22-13	I-3Cr	打製石斧	6.7	5.5	2	65	ホルンフェルス	両端欠損	
22-14	C-4Cr	磨石	10.8	8.4	4.9	480	花崗岩		
22-15	C-7Cr	石皿	21.8	16.1	8.6	2800	花崗岩	4分の1を欠損する。	

第 17 表 調査区内出土遺物観察表 (石製品)

番号	出土地点	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
11-33	3住2	磨石	5.075	5.26	4.83	127	石英安山岩		
14-8	4住	砥石	11	5.8	3.7	361	石英硬岩	半分欠損する	
25-7	B-5Cr	砥石	8.5	5.8	6.3	420	石英安山岩	側面の1/4を欠損する	

第 18 表 調査区内出土遺物観察表 (原石)

番号	出土地点	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	欠損状況	備考
5-13	H住1Cr	剥片	3.99	3.145	0.48	5.109	輝石凝灰岩		縁が剥離した剥片。
13-25	3住1 D1Cr	磨石	2.715	2.73	1.1	7.183	軟石英		打ち欠けた痕跡が認められる。
25-5	J-6Cr	剥片	1.9	2.575	1.38	4.902	斑状凝灰岩		自然剥離した面、1面に剥離痕がある。
25-6	H-9Cr	剥片	1.365	2.4	1.44	5.429	軟石英		片面に自然剥離、片面に打ち欠けた痕跡がある。

図版 1



遺跡遠景 (南東から)



北調査区全景 (西から)



中央調査区全景 (南から)



南調査区全景 (西から)



1号住居跡 (南東から)



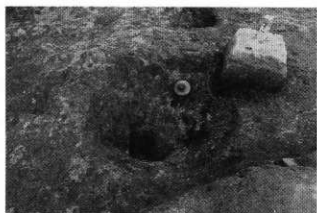
1号住居跡遺物出土状況 (西から)



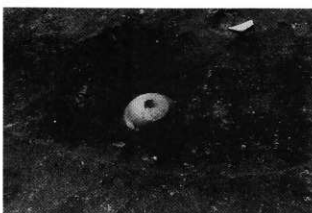
2号住居跡遺物出土状況全景 (南から)



2号住居跡全景 (南から)



2号住居跡貯蔵穴（南から）



2号住居跡遺物出土状況（南から）



3A号住居跡遺物出土状況全景（南東から）



3A号住居跡全景（南東から）



3A号住居跡遺物出土状況（南東から）



3A号住居跡遺物出土状況（西から）



3A号住居跡遺物出土状況（西から）



3B号住居跡全景（南東から）

図版 3



4号住居跡（南から）



5号住居跡全景（北から）



5号住居跡遺物出土状況（東から）



2号方形周溝墓全景（南東から）



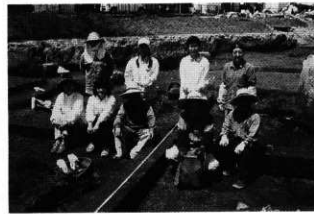
1号溝全景（西から）



2号溝全景（東から）



作業風景



調査参加者



5-2



5-4



5-7



5-5



5-11



5-9



5-8



5-6



5-10

图版 5

2号住居跡出土遺物(1)



7-1



7-5



7-8



7-6



7-9



8-21



8-22



7-15



7-14



8-20

3A号住居跡出土遺物(1)



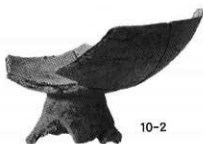
10-1



10-3



10-9



10-2



10-13



10-10



10-12



10-11

图版 7

3 A 号住居跡出土遺物 (2)



10-14



10-15



10-21



11-26



11-24



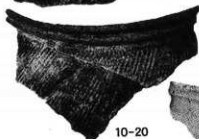
10-22



10-19



11-23



10-20



10-18



11-25



11-27



11-28



11-31



11-29

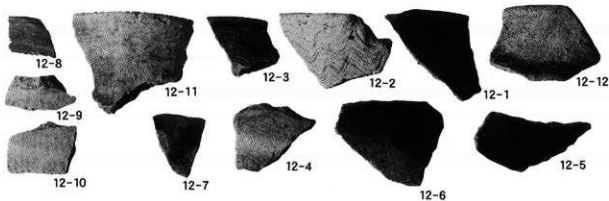


11-30



11-32

3 B 号住居跡出土遺物



4 号住居跡出土遺物

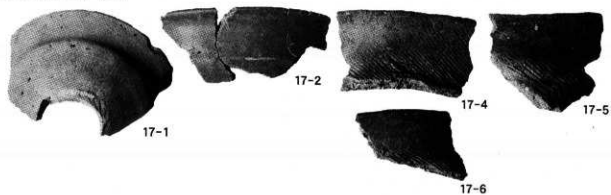


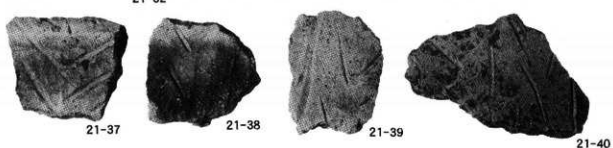
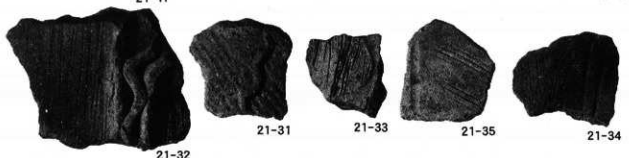
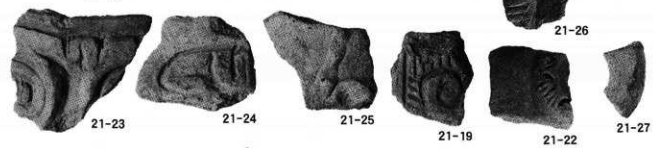
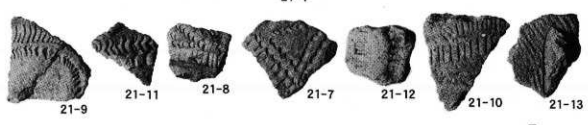
图版 9

5号住居跡出土遺物



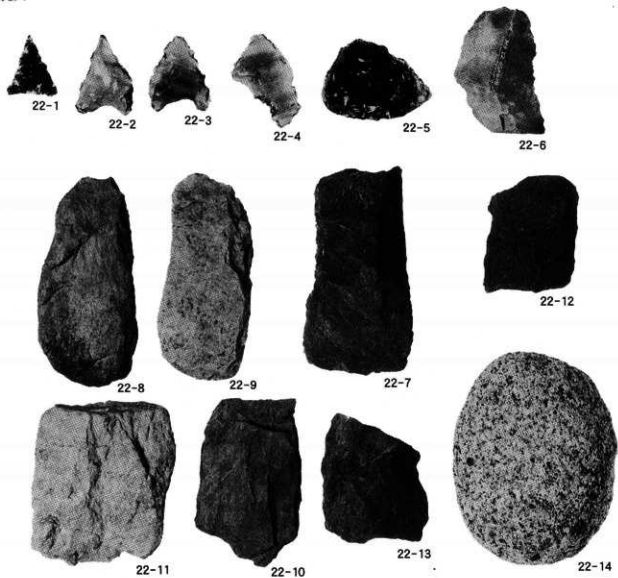
2号方形周溝墓出土遺物

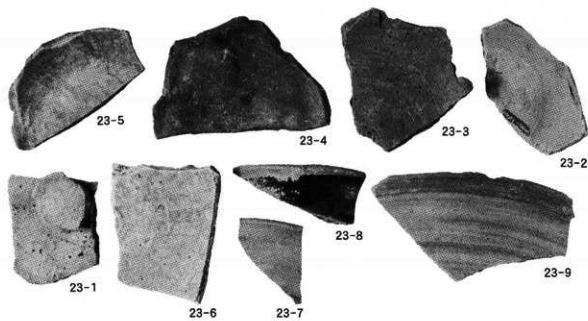
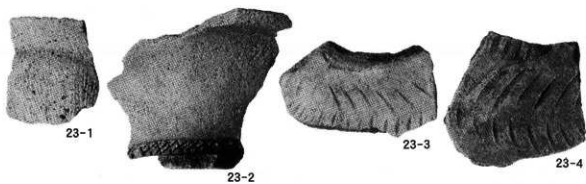
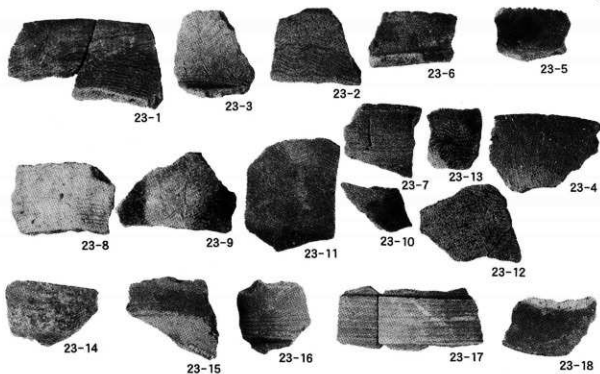






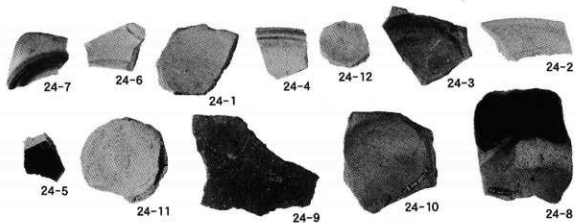
編文 2



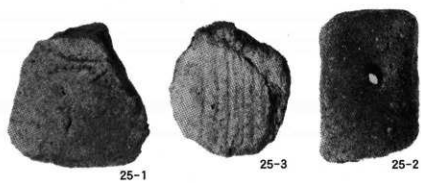
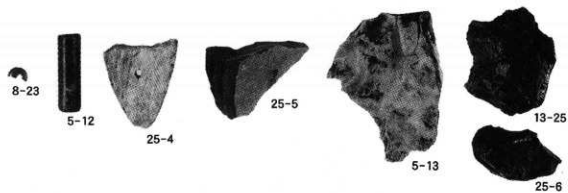


図版 13

中世



土・石・ガラス製品



報告書抄録

ふりがな	まっほういせき								
書名	末法遺跡Ⅲ								
副書名									
巻次									
シリーズ名	数島町文化財調査報告書								
シリーズ番号	15								
編著者名	三輪孝幸・大島正之・小坂隆司								
編集機関	数島町教育委員会・日本農業史研究所								
所在地	山梨県中巨摩郡数島町島上条1020 栃木県那須郡馬頭町小砂3112								
発行年月日	平成16年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒				
まっほういせき 末法遺跡	山梨県 中巨摩郡 数島町大下条 414-1外	193928	5			平成15年 3月31日～ 平成15年 5月2日	437	宅地造成	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
末法遺跡	集落跡	縄文時代 古墳 奈良・平安 中世	古墳 住居 跡 方形周 溝 墓 溝 土 坑	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 中世土器 貿易陶磁器 石器 管玉 ガラス小玉	古墳時代前・中期の集落跡。				

数島町文化財調査報告 第15集

末法遺跡Ⅲ

発行日 2004年(H16)3月31日

発行 数島町教育委員会

山梨県中巨摩郡数島町島上条1020

TEL(055)277-4111

印刷 南協和印刷社

